

福井県埋蔵文化財調査報告 第185集

沓 見 遺 跡

— 県営経営体育施設整備事業（は場）敦賀西部地区に伴う調査 —

2023

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第185集

沓 見 遺 跡

— 県営経営体育成基盤整備事業（ほ場）敦賀西部地区に伴う調査 —

2023

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、県営経営体育成基盤整備事業（ほ場）敦賀西部地区に伴って、敦賀市沓見において、令和元・2年度に実施しました沓見遺跡の発掘調査の成果をとりまとめました。

沓見遺跡は、敦賀平野西部の旗護山東麓に広がる扇状地上に立地しています。本調査地北東には、福井県指定史跡である穴地蔵古墳や渤海国の遣使一行が宿泊する「松原客館」の推定地の一つと考えられている櫛川遺跡が地下に埋蔵されています。

今回、2カ年にわたる本調査によって、弥生時代から古代に営まれた集落の存在が明らかになりました。

令和2年度の本調査では、弥生時代から古墳時代にかけての周溝をもつ建物や、古代の掘立柱建物を計10棟確認することができました。また、自然流路からは古墳時代の生活道具である壺や甕などの土器がまとまって出土しています。

弥生時代以降の集落跡が複数確認されている敦賀平野東部に対して、発掘調査自体が少なかった敦賀平野西部では集落跡の希少な発掘事例といえるでしょう。

本書が、今後地域の歴史研究に寄与するとともに、各方面で多くの皆様に広く活用されて、埋蔵文化財への理解をより一層深めていただければ誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

令和5年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所長 中川佳三

例　　言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、県営経営体育成基盤整備事業（ほ場）敦賀西部地区に伴い、令和元年度から2年度にかけて実施した杳見遺跡（福井県敦賀市杳見所在）の発掘調査報告書である。
- 2 杖見遺跡の調査は、嶺南振興局二州農林部の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、令和元年度は田中勝之・安達俊一、令和2年度は松本泰典・安達俊一が担当した。
- 3 発掘調査の支援業務は、令和2年度のみ株式会社エイコー技術コンサルタントに委託した。
- 4 発掘調査は、令和元年（2019）11月1日から同年12月27日、令和2年（2020）5月1日から同年8月31日まで実施した。出土遺物の整理作業は、令和3年（2021）4月1日から令和5年（2023）3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 5 本書の編集・執筆は松本が行った。
- 6 杖見遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 7 遺構・遺物の図化・図版作成は、安達・松本が行った。遺構の写真撮影は、田中・松本・安達、遺物の写真撮影は松本が行った。
- 8 本書に掲載した遺構図は、株式会社エイコー技術コンサルタントに委託して作成したものをお部改変して使用した。上空からの写真は、航空測量時に上記の委託業者が撮影したものである。
- 9 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真的縮尺は不同である。
- 10 本書における水平レベルの表示は、海拔（m）を示す。方位は真北と座標北を併用し、前者に限り「T.N.」と表記した。なお、X・Y座標値は国土平面直角座標系VIに基づく。
- 11 第1表は「福井県遺跡地図遺跡地名表」をもとに作成したが、種別・時代については最新の調査成果に合わせて変更した箇所がある。
- 12 土層や土器の色調については、主に農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を基準とする。
- 13 遺物実測図の網掛けは顔料塗布を示す。
- 14 発掘調査に際しては、次の方々および機関のご協力を得た（敬称略）。
　　杳見地区自治会、敦賀市教育委員会、嶺南振興局二州農林部農林整備課、敦賀西部地区圃場整備委員会
- 15 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご教示を得た（敬称略）。
　　中野拓郎・奥村香子（敦賀市教育委員会）、横川忠雄、灌幸夫
- 16 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および会計年度任用職員が行った。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 遺跡の概要	11
第1節 基本層序	11
第2節 遺構の検出状況	11
第3節 遺物の出土状況	14
第4章 遺構	15
第1節 周溝をもつ建物	15
第2節 据立柱建物	18
第3節 柱穴・土器集中遺構	23
第4節 自然流路	24
第5章 遺物	25
第1節 遺構内出土遺物	25
第2節 遺構外出土遺物	30
第6章まとめ	35
第1節 弥生・古墳時代の集落の時期と性格	35
第2節 平安時代の集落の時期と性格	35

図版目次

図版第1 遺跡 (1) 令和元年度調査区全景 (西から)	(2) SB 6 (北から)
(2) 令和元年度調査区全景 (俯瞰)	図版第11 遺構 (1) SB 1-P 2断面 (東から) (2) SB 1-P 3断面 (東から) (3) SB 1-P 4断面 (東から) (4) SB 1-P 5断面 (西から) (5) SB 2-P 1断面 (南西から) (6) SB 2-P 2断面 (南西から) (7) SB 2-P 3断面 (北東から) (8) SB 2-P 4断面 (北東から)
図版第2 遺跡 (1) 令和2年度調査区全景 (北西から)	図版第12 遺構 (1) SB 3-P 1断面 (西から) (2) SB 3-P 3断面 (西から) (3) SB 3-P 4断面 (南から) (4) SB 3-P 5断面 (東から) (5) SB 3-P 6断面 (東から) (6) SB 3-P 7断面 (東から) (7) SP183 遺物出土状況 (北から)
(2) 令和2年度調査区全景 (東から)	図版第13 遺構 (1) NR 1 (北西から) (2) NR 1断面 (南東から)
図版第3 遺跡 (1) 令和2年度調査区全景 (南から)	図版第14 遺構 (1) NR 3 遺物出土状況 (南西から)
(2) 令和2年度調査区全景 (俯瞰)	(2) NR 3 遺物出土状況 (南東から)
図版第4 遺跡 (1) 令和2年度調査区南側 (南東から)	図版第15 遺構 (1) NR 4 (南西から) (2) NR 4 (北東から) (3) NR 4 遺物出土状況 (北東から)
(2) 令和2年度調査区北側 (東から)	(4) NR 4 遺物出土状況 (南から) (5) NR 4 遺物出土状況 (西から)
図版第5 遺構 (1) SI 1 (東から)	図版第16 遺構 (1) NR 5 (北東から) (2) NR 5 遺物出土状況 (北東から)
(2) SI 2 (西から)	図版第17 遺構 (1) NR 5 遺物出土状況 (南東から)
図版第6 遺構 (1) SI 3 (北から)	
(2) SI 3周溝遺物出土状況 (南西から)	
(3) SI 3周溝断面 (東から)	
(4) SI 3-P 1断面 (南西から)	
(5) SI 3-P 2断面 (南西から)	
図版第7 遺構 (1) SI 4 (北東から)	
(2) SI 4 炉跡遺物出土状況 (西から)	
(3) SI 4周溝断面 (南東から)	
(4) SI 4-P 1断面 (南東から)	
(5) SI 4-P 2断面 (西から)	
図版第8 遺構 (1) SB 1 (西から)	
(2) SB 2 (北東から)	
図版第9 遺構 (1) SB 3 (北から)	
(2) SB 4 (北から)	
図版第10 遺構 (1) SB 5 (北から)	

- (2) NR 5 西半遺物出土状況
(北東から)
- (3) NR 5 遺物出土状況
(北から)
- (4) NR 5 須恵器出土状況
- 図版第18 遺物 遺構内出土遺物
- 図版第19 遺物 NR 1・3 出土遺物
- 図版第20 遺物 NR 3 出土遺物
- 図版第21 遺物 NR 3・4 出土遺物
- 図版第22 遺物 NR 5 出土遺物
- 図版第23 遺物 NR 5 出土遺物
- 図版第24 遺物 NR 5 出土遺物
- 図版第25 遺物 NR 5 他出土遺物
- 図版第26 遺物 岩見石ヶ町遺跡出土遺物

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図	1	第12図 SB 1 実測図	18
第2図 発掘現場写真	4	第13図 SB 2・4 実測図	19
第3図 敦賀平野の地形図	5	第14図 SB 3 実測図	20
第4図 周辺の遺跡分布図	7	第15図 SB 5 実測図	21
第5図 香見石ヶ町遺跡土器・土製品・ 石製品実測図	10	第16図 SB 6 実測図	22
第6図 グリッド配置図	12	第17図 SX 3・NR 5 実測図	23
第7図 土層模式図	12	第18図 遺構内出土土器・陶器実測図	25
第8図 遺構配置図	13	第19図 NR 1・3 出土土器・陶器実測図	27
第9図 SB 2・3・6 配置図	14	第20図 NR 4・5 出土土器・陶器実測図	28
第10図 SI 1・2・4 実測図	16	第21図 NR 5 出土土器実測図	29
第11図 SI 3 実測図	17	第22図 NR 5・SX 3 他出土土器実測図	30

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	7	第3表 香見石ヶ町遺跡石製品観察表	10
第2表 香見石ヶ町遺跡土器・土製品観察表	10	第4表 出土遺物観察表	31

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯（第1図）

沓見遺跡は、敦賀市沓見に所在する。調査前は水田地帯である。沓見遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、古墳時代から中世までの遺物散布地（福井県遺跡地図番号 06096）として登録されている。

福井県敦賀西部地区（敦賀市沓見・蒼生野・金山）では、ほ場の大区画化や農道・用排水路の整備を目指すため、福井県が県営經營体育成基盤整備事業として、農地区画の整理を進めている。この事業に伴い、嶺南振興局二州農林部と教育庁生涯学習・文化財課（以下、文化財課）によって、埋蔵文化財における取り扱いについて協議が行われてきた。

この事業を進めていく中で、沓見地区の五反田川北側に広がる埋蔵文化財包蔵地内（沓見遺跡）に農地用の溜池を設ける必要があり、工事対象範囲内において直接的に埋蔵文化財に影響を及ぼすことが予



第1図 調査区位置図（縮尺1/4,000）

想された。そのため、遺跡内容把握のための試掘調査を教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、埋文センター）が実施した。

試掘調査は、平成30年（2018）11月14日～16日に行われた。調査の結果、工事対象範囲で古墳時代から古代のかけての遺構や遺物が広がっていることが判明した。具体的には、対象範囲北・南側で溝・土坑・ピットを確認し、対象範囲南側で遺物包含層や遺物を顕著に確認した。遺物包含層や遺物が一部の範囲で多く残っていたのは、対象範囲南側では五反田川に向かって谷状に落ち込む地形であることが背景にあると考えられた。対象範囲の北側から中央にかけては、五反田川によって形成された微高地であったため、水田造成時に遺構の多くが削平されたと考えられる。

関係部局が試掘報告を受け協議をした結果、掘削を伴う溜池予定地については記録保存のための本格調査を実施すること、また、調査は嶺南振興局二州農林部が文化財課に依頼し、埋文センターが実施することを決定した。

以上の経緯のもと、令和元年（2019）11月から令和2年8月まで本格調査を実施することになった。なお、五反田川南側に広がる埋蔵文化財包蔵地内（杏見石ヶ町遺跡）においても、ほ場整備の影響範囲内で試掘調査が行われたが、試掘調査結果を受けた事業計画の変更により、計画敷地内における本格調査は見送られた。

第2節 調査の経過（第2図）

1 現地調査

本格調査は、令和元年（2019）11月1日～12月27日、令和2年（2020）5月1日～8月31日の2カ年に分けて実施した。令和元年度の調査面積は2,000m²、令和2年度の調査面積は6,200m²で、両調査区の総面積は8,200m²である。調査区には、一辺10mの方形グリッドを設定し、北から南方向にA～L、西から東方向に0～12の記号を付し、グリッド名とした。

調査では、表土・旧耕作土を重機で掘削したのち、人力にて遺構検出・遺構掘削を行った。遺構図化や撮影は、測量業者による空中写真測量とドローンの全景撮影で実施し、個別遺構の図化・撮影については随時行った。なお、令和2年度の調査においては、調査区内に既設農道とそれに対設する排水路が横断しており、この農道部分の表土・旧耕作土の掘削は発掘調査と並行して実施した。事務所・器材の搬出入や発掘作業員の手配などについては発掘支援業者である株式会社エイコー技術コンサルタントに委託した。

以下、調査日誌を抄録する。

令和元年度（2019）

11月1日	表土を重機で掘削開始。	12月9日	調査区全体清掃開始。
11月13日	調査区内排水。ベルトコンベア設置。	12月10日	ピット埋土掘削。
11月14日	トレチ掘削。	12月11日	NR1埋土掘削。
11月21日	調査区北西から遺構検出開始。	12月13日	杏見小学校の先生と生徒見学（46名）。
11月22日	自然流路が調査区北側に広がることを確認。	12月16日	NR1埋土掘削。
11月26日	調査区南西の遺構検出開始。	12月17日	空撮前清掃。
11月27日	2条の自然流路を検出・掘削（NR1・2）。埋土から古代・中世の遺物が出土。	12月19日	空中写真測量。
12月3日	調査区南側の表土掘削。	12月20日	器材など搬収開始。
		12月27日	搬収完了。

令和2年度（2020）

5月1日	表土を重機で掘削開始。	6月4日	既設農道部（G列）の表土掘削を完了。ベルトコンベアを調査区北半から南半へ移動。NR5の下層の埋土を掘削。
5月7日	重機掘削時にB-11遺構検出面でNR5を確認。	6月8日	G～I-10・11で黒褐色土の遺物包含層を掘削・遺構検出開始。弥生土器・土師器・古代の須恵器が出土。
5月8日	重機掘削時にE・F-11遺構検出面でピットを複数確認。	6月10日	S13検出。J・K-11に落ち込みが広がることを確認。
5月13日	現場事務所・器材など設置開始。	6月12日	NR5の掘削・遺物取り上げ終了。K-11で土師器や種子が多く出土。
5月15日	草刈り・壁面清掃。調査区南半では重機による掘削を継続。	6月15日	NR3で古墳時代中期の土器が多量に出土。
5月16日	調査区内排水。	6月22日	S13の周溝埋土から弥生時代後期の土器がまとめて出土。
5月18日	調査区北半から調査開始。ベルトコンベア設置・トレーンチ掘削。調査区南半では重機による掘削。遺物包含層を広い範囲に確認。	6月23日	S13周辺で遺構検出。
5月20日	調査区内に集落排水路から水が流入しているため、二州農林部および地元業者と協議。仮設排水路などで対応。	6月25日	S13・4完掘状況の撮影。
5月22日	A-6～11、B-10・11遺構検出および遺構埋土掘削開始。重機による旧耕作土掘削終了。	6月29日	落ち込みが南西方向に延びる自然流路であることを確認（NR4）。
5月25日	NR5から古墳時代の土器が多量に出土。	6月30日	雨天中止。7月前半まで雨天が多くなる。
5月27日	C-10・11の遺構検出。NR2の東端を確認。	7月9日	H～K-6～9遺構検出。S14検出。
5月28日	D～F-10・11遺構検出開始。	7月16日	SB1・6検出。
5月29日	S11埋土掘削・撮影・断面図作成。S11のピット埋土から遺物の出土はないが、平面形態から弥生・古墳時代と推定。	7月17日	SB2・3検出。
6月1日	既設農道部（G列）の表土を重機で掘削開始。NR5の埋土を掘削。特に高窪が多く出土。	7月27日	J～K-1・2遺構検出。
6月2日	NR5遺物出土状況撮影。J-1～11に排水トレーナーを掘削。	7月30日	空撮前の清掃開始。
6月3日	H～L-11の調査区東壁沿いにトレーンチ掘削。遺物包含層が厚く堆積していることを確認。	8月8日	現地説明会開催（約100名来場）。
		8月13日	豪雨のため調査区東側が水没。排水作業。
		8月14日	空中写真測量。
		8月20日	NR3・4埋土掘削。
		8月24日	器材など撤収開始。
		8月31日	撤収完了。

2 遺物整理作業

本調査で出土した遺物のコンテナ箱数は、令和元年度の調査で1箱、令和2年度の調査で26箱、計27箱である。遺物整理作業は調査担当者および整理・普及グループの職員があたり、令和3年度（2021）に遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測および遺構図版作成、令和4年度（2022）に遺物実測図のトレースを実施したほか、原稿執筆・遺物写真撮影・写真図版作成を進めた。

以上の作業を経て、令和5年（2023）3月の本報告書刊行をもって杳見遺跡の発掘調査事業を完了した。



表土・旧耕作土掘削



ベルトコンベア移動



遺物包含層掘削



遺構検出



遺構埋土掘削



小学生への発掘授業



発掘現地説明会



発掘現地説明会（出土遺物展示会場）

第2図 発掘現場写真

第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

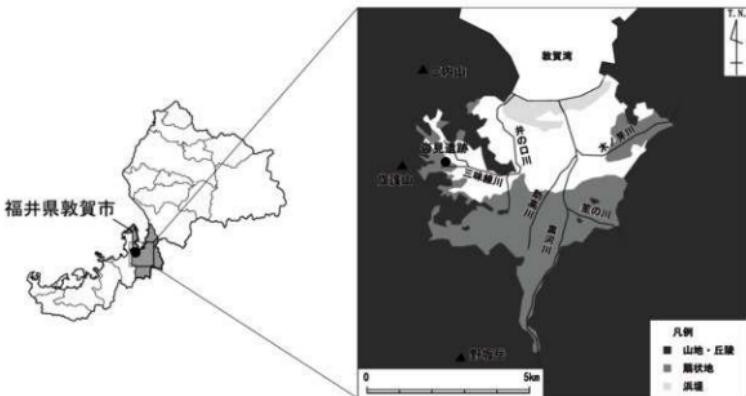
第1節 地理的環境（第3図）

福井県は、敦賀と今庄の間の山中峠、木ノ芽峠、柄ノ木峠をつなぐ山稜を境にして、北部を嶺北地方、南部を嶺南地方と呼び分けられている。敦賀市域は、嶺南地方の最東端にあたり、東は福井県南条郡南越前町と滋賀県長浜市、南は滋賀県高島市・長浜市、西は三方郡美浜町に接しており、南は敦賀湾を介し日本海に面している。敦賀市域の地形は、西・南・東の三方の山地が敦賀平野を取り囲むことに特徴がある。西から、敦賀半島にある西方ヶ岳（標高764m）、美浜町との境にある三内山（521m）・旗護山（318m）・野坂岳（913m）・三国山（876m）、滋賀県との境にある乗鞍岳（865m）・行市山（660m）、嶺北地方との境にある鉢伏山（762m）があり、いずれも分水嶺を形成している。

これらの山稜を水源にした河川は敦賀平野を通って敦賀湾に流れ込んでいる。野坂岳や旗護山を水源とする井の口川、三国山や乗鞍岳を水源とする黒河川、南と東の滋賀県境の山稜を水源とする笙の川、鉢伏山を水源とする木ノ芽川がある。黒河川と木ノ芽川は、笙の川の支流であり、黒河川は和久野で、木ノ芽川は東洋町で笙の川に合流する。

敦賀平野は、元々木ノ芽断層と野坂断層という南北方向の断層によって平野部が沈降し、その沈降部に河川が運ぶ土砂の堆積によって形成されたといわれる。木ノ芽川や黒河川などの河川のうち、山間出口から平野中央にかけて扇状地が発達する。扇状地は旧扇状地と新扇状地に区別され、旧扇状地は河岸段丘として形成され、新扇状地は沖積世以後に形成された。中でも敦賀平野南部の黒河川扇状地は最も発達している。

この扇状地から敦賀湾に面する浜堤までの間には三角州が形成されている。この生成は、潟湖内に河川による堆積物が埋積された結果といわれている。つまり、繩文海進ピーク時（繩文時代前・中期：約7000～5000年前）には、旧扇状地の浸食面まで海成層が堆積していたことから、現敦賀平野の大部分が海面下にあり大きな入り江が形成されていた。繩文海退期（繩文時代後・晚期：約4000～3000年前）には入り江が潟湖化する。その後、河川の氾濫堆積物によって潟湖が徐々に浅海から陸化し、弥生時代中



第3図 敦賀平野の地形図（縮尺1/150,000）

期の約2000年頃前にはほぼ堆積は終了したと考えられている（山口 1980、中野 2004）。

敦賀湾に対して東西方向の弧状に形成されている浜堤は、国指定名勝である氣比の松原によって保護されているものの、東半分は港湾整備によって自然状態は残されていない。西半分は三列の浜堤列が認められ、標高4~6mを測る。松原公園がある最前列が最も高く、その南側二列の浜堤は現状ではあまり高くない。浜堤内から弥生時代中期の土器が出土していることから、この時代までには浜堤が形成されていたようである。沓見遺跡のある敦賀平野西部では、扇状地はあまり発達せず崖錐が発達している。崖錐は、重力の直接作用によって、急な斜面上の風化した岩屑が崖下に落下してできた円錐状の堆積地形である。敦賀平野西部では平野の幅が狭く、自然堤防もあまり発達していない。旗護山から南東に延びる山稜（金山）と三内山から南東に延びる木崎山の間に挟まれた平野は、沓見地区の範囲とおおむね重なり、三味線川や五反田川が運んだ河川堆積物によって形成された（第4図）。

沓見地区は、昭和時代末期から山麓を中心に宅地化が進んだが、現在もなお広大な水田が広がる敦賀市内最大の農村地帯である。これまでの沓見地区におけるほ場整備事業に伴う排水路掘削工事の際にも、泥炭層が水田耕作土下に広い範囲にわたって存在することが既に確認されている。このことから、比較的地盤が安定している敦賀平野東部に対して、敦賀平野西部では河川の氾濫による低湿地化が進んでいたといわれている（中司2009）。一方で、敦賀平野西部の低湿地化は、古代後期における黒河川の活発な堆積作用によってせきとめられた三味線川の排水不良によるものであって、古代以前は土地が乾燥した地域であったという意見もある（中野2004）。

旗護山東麓で形成された扇状地上には、現在では西側に沓見集落、東側に水田耕作地が形成されている。沓見遺跡は現在の水田耕作地、すなわち旗護山東麓に広がる扇状地の東側に立地している。

第2節 歴史的環境（第4・5図）

沓見遺跡（1）周辺における遺跡の様相について、時代別に概観する（第1表）。

旧石器時代 敦賀市域では、野坂岳山頂付近でナイフ形石器が発見されている（敦賀市立博物館2001）。

縄文時代 柳川鉢谷遺跡（A）と木崎山南遺跡（B）では、平成15年（2003）に、敦賀市教育委員会が発掘調査を実施している（敦賀市教委2004）。柳川鉢谷遺跡では、遺構を確認できなかったが、主に縄文時代前・中期の土器や石礫・磨石・石錘などの石器が出土し、敦賀市域における集落の初現が縄文時代前期に遡ることを明らかにした。なお、同遺跡では縄文時代晚期後半の突帯文土器も出土している。木崎山南遺跡では、縄文時代中期の土器がわずかに出土している。

弥生時代 敦賀平野東部では、坂ノ下遺跡から弥生時代前期の土器が出土しているが、敦賀平野西部では弥生時代前期の遺物は出土していない。沓見越塚遺跡（14）では弥生時代中期の壺が出土したという（福井県埋文2009）。また、出土地点の詳細は不明であるが、柳川遺跡（17）から松原遺跡にかけて弥生時代中・後期の土器が出土したという（広島1970、山口1980）。前述した柳川鉢谷遺跡では弥生時代中期、木崎山南遺跡では、弥生時代後期の遺物を発掘調査で確認している。特に、木崎山南遺跡では、弥生時代後期の土器がまとめて出土したほか、石器や鉄器も出土しており、敦賀市域における鉄器使用が弥生時代後期に遡ることが明らかになった（敦賀市教委2004・08）。勘生野遺跡（6）では、平成31年（2019）の福井県埋文センターによる試掘調査で弥生時代の遺物包含層を確認している。

古墳時代 木崎山南遺跡では、弥生時代末～古墳時代初頭の柱穴や焼土面のほか、土器やミニチュア土器、鐵鏃が出土している（敦賀市教委 2008）。また、同じ木崎山山麓に花崗岩を用いた石室があり、



第4図 周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）

第1表 周辺の遺跡一覧表

碑固 番号	遺跡 番号	遺跡名	所在地	種別	時代	碑固 番号	遺跡 番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	066098	香見山遺跡	敦賀市香見	散布地	弥生～中世	12	06099	奈岐松ノ木遺跡	敦賀市奈見	散布地	中世・近世
2	066098	金山城跡	敦賀市金山	城跡	中世	13	06100	馬加塹穴墓群	敦賀市香見	古墳	古墳
3	066098	金山池ノ谷遺跡	敦賀市金山	散布地	弥生～中世	14	06101	奈見越塙遺跡	敦賀市奈見	散布地	弥生
4	066090	沢遺跡	敦賀市沢・金山	散布地	古墳～中世	15	06102	木崎山城跡	敦賀市木崎	城跡	中世
5	066091	島生野古墳群	敦賀市島生野	古墳	古墳	16	06103	木崎遺跡	敦賀市木崎	散布地	中世
6	066091	島生野遺跡	敦賀市島生野	弥生・古墳		17	06104	棚川遺跡	敦賀市松葉町・棚川町	散布地	弥生～中世
7	06093	旗瀬山城跡	敦賀市香見	城跡	中世	18	06107	勝兼衣谷横穴墓	敦賀市原	横穴	中世
8	066094	香見櫻穴墓群A	敦賀市香見	横穴	中世	19	06108	妙華谷横穴墓	敦賀市原	横穴	中世
9	066095	香見櫻穴墓群B	敦賀市香見	横穴	中世	20	06109	西福寺坊院跡	敦賀市原	寺院	中世
10	066097	香見石ノ町遺跡	敦賀市香見	散布地	古墳～中世	21	06110	棚川古墳群	敦賀市棚川町	古墳	古墳
11	066098	香見杉ノ谷遺跡	敦賀市香見	散布地	中世・近世						

剣・耳環・土器が出土したと報告されている（山口1980）。沓見遺跡の南東に位置する沓見石ヶ町遺跡（10）では、本調査は行われていないが、平成31年（2019）に福井県埋文センターによる試掘調査で古墳時代中期の土器や滑石製白玉が出土した。詳細は後述する。三内山南麓に位置する櫛川古墳群（21）には3基の円墳が確認されており、その一つである穴地蔵古墳は、古墳時代後期（6・7世紀）の横穴室石室を備えた推定径12mの円墳で、福井県史跡に指定されている。石室内には県内外でも希少な石棚が設けられており、古墳時代の須恵器や馬具などが出土している（敦賀市教委2001）。他2基のうち1基は工事により消滅したが、両古墳とも古墳時代後期に築造された（山口1980、敦賀市教委1990）。このように、古墳時代前期に古墳が築造される敦賀平野西部とは対照的に、敦賀平野東部では古墳時代後期になってようやく古墳が築造されるようになる。櫛川遺跡（17）では、古墳時代初頭・前期・後期の遺物が出土しており、古墳時代後期（6世紀後半）の製塩炉を確認できる。敦賀半島の浦底遺跡では、敦賀市内最古の製塩土器（6世紀代）が見つかっており、古墳時代後期には敦賀市域で製塩活動が開始していたと考えられる（敦賀市史編さん委員会1985、敦賀市教委1989・90）。

奈良・平安時代 敦賀湾に面する気比の松原（国指定名勝）は、敦賀湾最前に面する浜堤上に立地しているが、櫛川遺跡（17）や松原遺跡（櫛川遺跡東側）は、それ以前に形成された内陸側の浜堤上に立地する。この一帯は古くから松原の名で呼ばれ、渤海国（698～926年）の遣使一行が宿泊する「松原客館」が設置された推定地の一つと伝えられているほか、「続日本紀」の記述から、松原駅や敦賀郡衙の比定地の一つとして想定されている。櫛川遺跡では、昭和54年（1979）に、福井県埋文センターによる発掘調査で、8世紀末～10世紀半ばの浅皿状遺構と銅鏡・銅錢・須恵器（碗・蓋・壺など）などが出土している。その出土状況は祭祀の状況を示すと考えられている（山口1986、敦賀市教委1989）。また、その調査区周辺の発掘・分布調査が、昭和63年（1988）および平成元・16年（1989・2004）に、敦賀市教育委員会によって実施されており、主に9世紀代の製塩遺構のほか、同時期の須恵器や製塩土器が出土している（敦賀市教委1989・2008）。

中・近世 中世になると、周辺の旗護山や木崎山、金山に、各々旗護山城跡（7）、木崎山城跡（15）、金山城跡（2）が築かれる。旗護山城の城主は、沓見氏または山本氏が城主と想定され、東麓には沓見氏屋敷跡（C）があるといわれている（福井県教委1987）。また、西福寺を南東麓にもつ三内山の山頂から東に延びる尾根上に花城山城が立地し、「信長秀吉陣取山」が櫛川・松原周辺に所在したことを探している（福井県教委1987）。石塔や石仏では、沓見宝塔と呼ばれている宝篋印塔（D）が敦賀市指定文化財として現在も保存され、刻銘から長享三年（1489）の製作とされる。櫛川古墳群（21）の穴地蔵古墳の石室内には、3体の地蔵尊が置かれており、刻銘からそのうち1体は永正十五年（1518）に製作されている。原の西福寺は淨土宗派中本山として福井県内屈指の寺格を誇り、多数の指定文化財を所有している。「紙本着色西福寺古図」や昭和63年・平成4年（1988・1992）の発掘調査により、現在の西福寺伽藍周辺に中世以来の坊院が並んでいたと推定されている（20）。

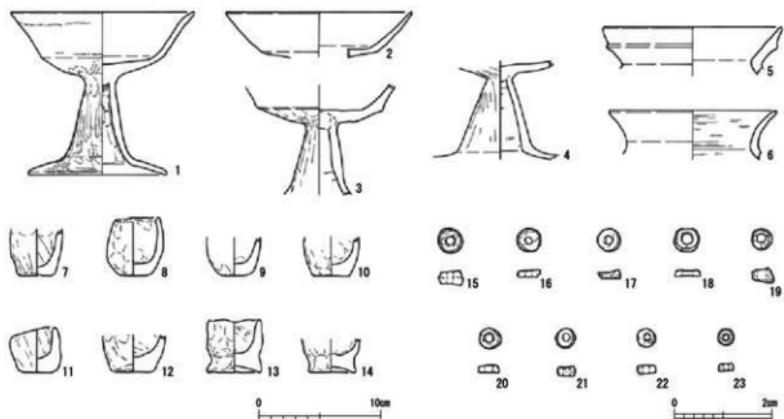
本遺跡周辺では、沓見横穴墓群A・B（8・9）や馬坂横穴墓群（13）、善衆衣谷横穴墓（18）、妙華谷横穴墓（19）で横穴墓が確認されている。また、常宮や沓、繩間、また敦賀市内東部の大比田や疋田などでも横穴の確認事例があるという（梅原1915a・b・1916）。横穴は、主室・入口・前室・通路溝で構成されており、常宮の薬研谷横穴群での測量や編年検討も行われている（網谷2013）。古墳時代後期の墓であるという見方が一般的であるが（梅原1916、網谷2013）、中世墓などへの再利用も含めて、敦賀市域における横穴の実態は今後の調査に待つところが大きい。

沓見地区では前述の沓見横穴墓群Bから南東約200mの位置に（字風呂山）、1基の横穴を現地踏査で確認しており、これは從来「風呂山の横穴」と呼ばれている三室連続構造の横穴である可能性がある（梅原1915b、横川1979）（E）。また、宇明光（F）や宇建田（G）を現地踏査した際にも、横穴を各々確認している（一方で、住宅地近くで確認できる横穴は防空壕と伝わる例もある）。前述の風呂山の横穴では勾玉が出土したという記録のほか（横川1979）、沓見横穴墓群Bの遺跡範囲内（沓見の宝塔付近）で初期須恵器が発見されている（山本1989）。沓見杉ノ谷遺跡（11）や沓見松ノ木遺跡（12）は中・近世の遺物散布地だが、詳細は不明である。

第5図は、前述した沓見石ヶ町遺跡の試掘調査で出土した遺物である。県営経営体育成基盤整備事業に伴う調査によるもので、遺跡の遺存状況を把握するために、遺跡範囲のほぼ全域にわたって試掘調査を行った（32箇所）。このうち、15箇所で主に古墳時代の遺構や遺物包含層を確認しており、そのうち1箇所の試掘トレンチでは、褐色粘質土（厚さ10cm）から古墳時代中期の土器や滑石製臼玉がまとまって出土した（第1図）。高杯やミニチュア土器、白玉が单一地点に複数まとめて出土したため、古墳時代の祭祀の状況を示しているものと推定する。また、当該トレンチ北側には五反田川が流れしており、近隣の試掘トレンチでも湿地状の堆積物を確認しているため、川辺に関わる祭祀であった可能性もある。遺物の詳細は第2・3表に譲る。

引用・参考文献

- 網谷克彦 2013 「敦賀市薬研谷横穴群の研究 一分布調査データに基づく編年試案ー」『敦賀短期大学紀要 敦賀論集』第27号
 梅原末治 1915a 「第四編社寺古跡 第三章古跡 敦賀郡の古墳に就て（抄略）」『敦賀郡誌』
 梅原末治 1915b 「越前敦賀郡の遺跡遺物」『考古学雑誌』第5巻第8号
 梅原末治 1916 「統越前敦賀郡の遺物と遺跡」『考古学雑誌』第7巻第1号
 敦賀市教育委員会 1989 「松原遺跡 一昭和63年度櫛川・別宮神社周辺地区的分布および試掘調査ー」敦賀市埋蔵文化財調査
 要報－1
 敦賀市教育委員会 1990 「穴地蔵古墳群 松原遺跡 一平成元年度櫛川地区分布・試掘調査および穴地蔵3号墳発掘調査ー」
 敦賀市埋蔵文化財調査要報－2
 敦賀市教育委員会 2001 「穴地蔵古墳 福井県指定史跡保存修理事業報告書」
 敦賀市教育委員会 2004 「市内遺跡発掘調査報告 宮山古墳群・公文名遺跡・木崎山南遺跡・櫛川鉢谷遺跡等」
 敦賀市教育委員会 2008 「市内遺跡発掘調査報告 木崎山南遺跡第3次～第5次・櫛川遺跡等」
 敦賀市史編さん委員会 1985 『敦賀市史』通史編 上巻
 敦賀市立博物館 2001 『企画展 弘生時代のツルガ』
 中司照世 2009 「第2章周辺の地理的・歴史的環境」『吉河遺跡』一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書第2集
 中野拓郎 2004 「第7章まとめ」『市内遺跡発掘調査報告 宮山古墳群・公文名遺跡・木崎山南遺跡・櫛川鉢谷遺跡等』
 広嶋一良 1970 「松原遺跡」『福井県における弘生式土器集成』福井考古学研究会
 福井県教育委員会 1987 『福井県の中・近世城郭跡』
 福井県教育委員会 1993 『福井県遺跡地図』
 福井県教育厅埋蔵文化財調査センター 2009 『吉河遺跡』一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書第2集
 福井県神社庁敦賀市支部 1986 『敦賀郡神社誌』
 山口充 1980 「第II章周辺の環境」『中遺跡』北陸自動車道関係遺跡調査報告書第14集 福井県教育委員会
 山口充 1986 「134 松原遺跡」『福井県史』資料編13 考古 本文編
 山本昭治 1989 「敦賀市沓見出土の土器」『福井考古学会会報』第26号 福井考古学会
 横川栄 1979 『沓見誌』



第5図 番見石ヶ町遺跡土器・土製品・石製品実測図（縮尺1/4、15～23：縮尺1/1）

第2表 番見石ヶ町遺跡土器・土製品観察表

遺物 番号	種別	基盤	法量(cm)			調査		色調		性成	備考
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土器器	高杯	(15.2)	(11.3)	13.6	口縁部：横ナデ 外縁部：ナデ 脚部：横オサエ 脚端部：横ミガタ	口底部：横ナデ 底底部：ナデ 脚部：横ケズリ 脚端部：横ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	
2	土器器	高杯	(15.6)			口縁部：横ナデ 外縁部：ナデ	横ナデ	浅黄褐色	にぶい褐色	良	
3	土器器	高杯				口縁部：横ナデ 外縁部：ナデ 脚部：横オサエ 脚端部：横ミガキ	口縁部：横ナデ 外縁部：ナデ 脚部：ナデ、横ケズリ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	
4	土器器	高杯				外縁部：ナデ、指オサエ 脚部：横ミガキ	外縁部：ハケ 脚部：横ケズリ、ナデ	灰白色	浅黄褐色	やや良	
5	土器器	盃	(14.8)			横ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	やや不良	
6	土器器	甌	(13.8)			横ナデ	横ハケ	灰白色	灰白色	良	
7	土製品	容器型土製品			3.0	ナデ	ナデ	灰色	良	手捏ね	
8	土製品	容器型土製品	3.7	2.6	4.9	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	手捏ね
9	土製品	容器型土製品	2.7			ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	やや不良	手捏ね
10	土製品	容器型土製品	3.2			ナデ	ナデ	暗灰色	明褐色	手捏ね	
11	土製品	容器型土製品	3.7	3.2	3.8	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	手捏ね
12	土製品	容器型土製品	3.5			ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	手捏ね
13	土製品	容器型土製品	(4.1)	4.4	4.5	ナデ、指オサエ	ナデ	明赤褐色	褐色	良	手捏ね、脚台
14	土製品	容器型土製品			3.7	ナデ、指オサエ	ナデ、指オサエ	浅黄褐色	にぶい褐色	やや良	手捏ね、脚台

※器高について：完形品および略形品を記載対象とした。

第3表 番見石ヶ町遺跡石製品観察表

遺物 番号	種別	種類	材質	法量(cm)			重量(g)	色調	備考
				幅(径)	厚さ	孔径			
15	石製品	白玉	滑石	0.50	0.30	0.16	0.1084	オリーブ灰色	一部欠
16	石製品	白玉	滑石	0.46	0.16	0.15	0.0695	灰色	
17	石製品	白玉	滑石	0.48	0.20	0.14	0.0627	緑黒色	
18	石製品	白玉	滑石	0.57	0.15	0.22	0.0489	暗緑灰色	一部欠
19	石製品	白玉	滑石	0.35	0.32	0.19	0.0576	暗緑灰色	
20	石製品	白玉	滑石	0.34	0.17	0.20	0.0458	緑黒色	一部欠
21	石製品	白玉	滑石	0.39	0.21	0.15	0.0527	暗灰色	
22	石製品	白玉	滑石	0.38	0.20	0.13	0.0443	暗緑灰色	
23	石製品	白玉	滑石	0.31	0.17	0.13	0.0349	暗緑灰色	

第3章 遺跡の概要

第1節 基本層序（第6・7図）

沓見遺跡は三味線川の支流である五反田川が形成した扇状地上に立地している。発掘調査に入る前の調査地点は、調査地点周辺の農地と同様に水田耕作地として利用されており、段状に整備された水田区画が西から東に向かって展開していた。

発掘調査は、事前の試掘調査において遺構や遺物包含層が確認された部分を対象としており、令和元年度の調査はA～E-2～7、令和2年度の調査はそれ以外の部分を発掘対象とした。

基本層序は、1層：黒褐色～黄灰色粘質土（耕作土）、2層：黄灰色～黒褐色粘質土（耕作客土）、3層：オリーブ褐色砂礫・砂質土（扇状地堆積層・旧耕作土）、4層：黒褐色砂質土（遺物包含層）、5層：黄褐色砂礫・砂質土（地山層）である（第7図）。

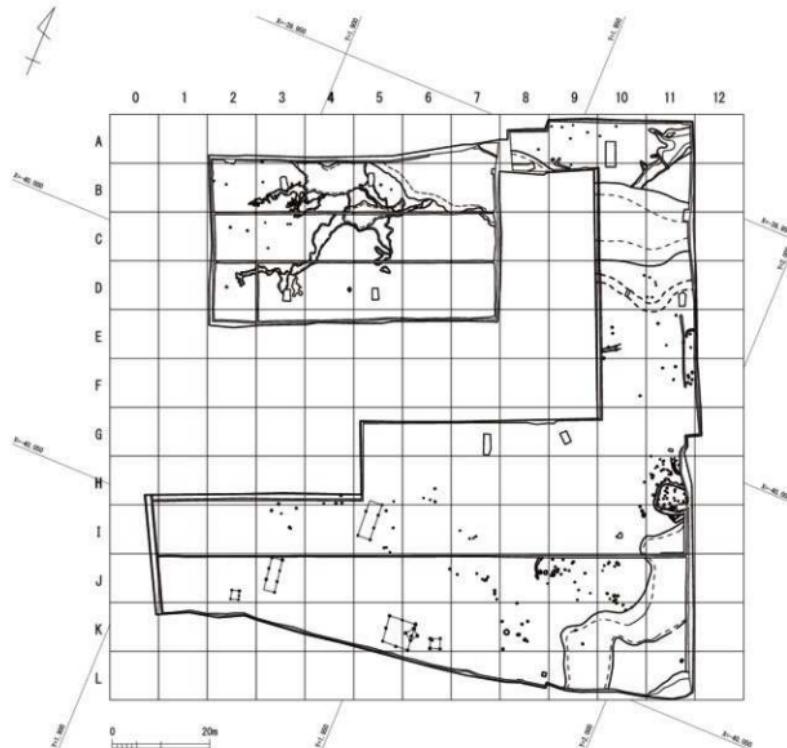
5層の地山層は遺物を含まない扇状地堆積層である。安定した黄褐色面であることから、基本的にこの面で遺構検出を行った。また、この地山層の傾斜度は西側にいくほどなだらかであるが、総じて西から東に向かって勾配約3度の緩やかな傾斜面を形成している。1層は厚さ約30～50cm、2層は厚さ約10～30cmを測る。両層は近現代以降の耕作層で、西側にいくほど層厚が厚くなる。1・2層からは耕作地に伴う矢板などの土木材を確認している。3層は厚さ約10～30cmを測る。上層の耕作土と下層の地山層との間にある漸移層としての土質を有している。砂礫が少なからず混じるため、おおむね扇状地堆積層と考えられる。ただ、一部の地点で灰色系の土を混じえるため、旧耕作土として利用された地点も含んでいる可能性がある。この層からも近現代の遺物が出土している。

4層の遺物包含層は、主に調査区南東隅（I～K-10・11）で堆積しており、厚さ約10～30cmを測る。この層からは、弥生時代後期から古代までの遺物が小破片で散在的に出土した。この層面で遺構検出を試みたが、遺構を検出することはできなかった。この層を掘り下げると地山面で、NR4を検出し、遺物包含層とNR4埋土の堆積範囲はほぼ重なることがわかった。このことから、主にNR4への再堆積および人為的な廃棄行為が加わったことによって、この遺物包含層が形成されたと推定する。

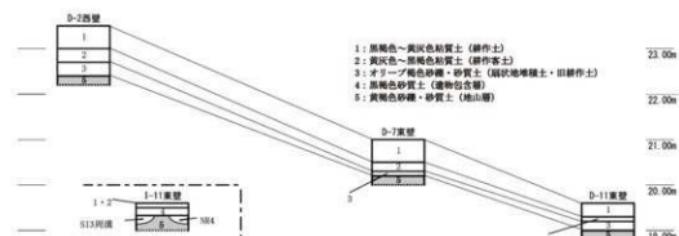
調査区全体の旧地形で注意されるのが、調査区南半（G-5からG-11へと延びるラインとL-7からI-11へと延びるラインの内側）でなだらかな微高地が形成されていることである。この微高地から北方向および南東隅方向はなだらかに落ち込んでいる。この落ち込みは、自然流路（NR2・4）が川岸を削ったことによるが、NR4の内部に土砂が堆積し始めた時期が弥生時代から古墳時代であることを考慮すると、弥生・古墳時代には、NR4を流路とした微高地が存在していたと考えられる。実際に、この微高地の範囲には弥生時代～古代の建物遺構（SI2～4、SB1～6）が集中しており、微高地としての安定した地盤が居住域を支えたものと考えられる。一方、近世～近現代の自然流路であるNR2が地山層を大きく削平したことを考えると、弥生・古墳時代における微高地は調査で確認した範囲よりも北方向へさらに広がっていた可能性も考えられる。NR2の南岸でわずかな痕跡を検出した建物遺構（SI1）はその可能性を支持する事例といえる。

第2節 遺構の検出状況（第8・9図）

検出した主要な遺構は、周溝をもつ建物（SI）4棟、掘立柱建物（SB）6棟、土坑（SK）1基、井戸



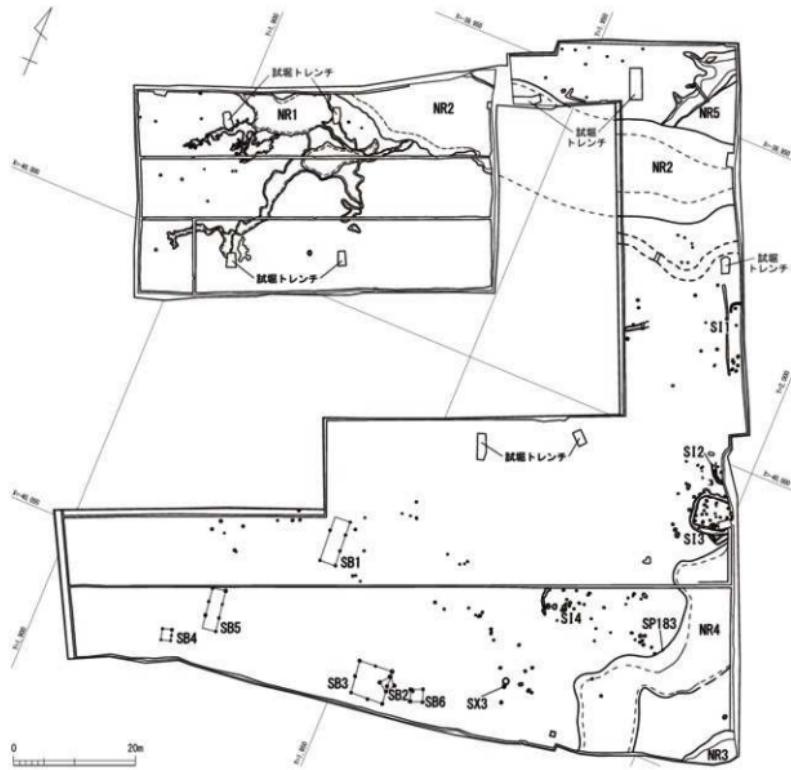
第6図 グリッド配置図（縮尺1/1,000）



第7図 土層模式図

(SE) 2基、溝 (SD) 1条、ピット (SP) 約200基、土器集中遺構 (SX) 1基、自然流路 (NR) 5条である。扇状地という地形環境および近世・近現代の耕作状況を鑑みると、遺構の多くが自然流路や耕作・造成などによって大きく削平を受けており、削平されて消滅した遺構は数多くあると推測できる。一方で、標高が高い調査区西側と標高が低い調査区東側とでは建物の柱穴の深さに大きな違いがないため、当時の旧地表面は検出した基盤層面と同じように西から東へ緩やかな傾斜が続いていると想定している。

建物はE-11やH・I-11、I-5、J-2・3・8・9、K-5・6、自然流路は調査区北側および南東隅で検出した。建物に伴う遺物は少ないが、周溝をもつ建物は弥生時代後期から古墳時代、掘立柱建物は古代の時期であると推定している。SB2・3・6はK-5・6に集中するが、建物同士で遺構の切りあいや主軸のずれが認められ、整然とした建物配置は見られない（第9図）。建物として把握できなかつたピットは深さ10～20cmが多数だが、稀に深さ30cmを超える例も存在する。これらのピットは散在的に検出されるのが通例であり、主にB・C-2・3やE・F-11、H-11、I-3～7、J-7～10、K-8でピット群を確認できる。これらは弥生時代以降の柱穴の痕跡と考えられるが、自然窪地も含んでいる可



第8図 遺構配置図（縮尺1/800）

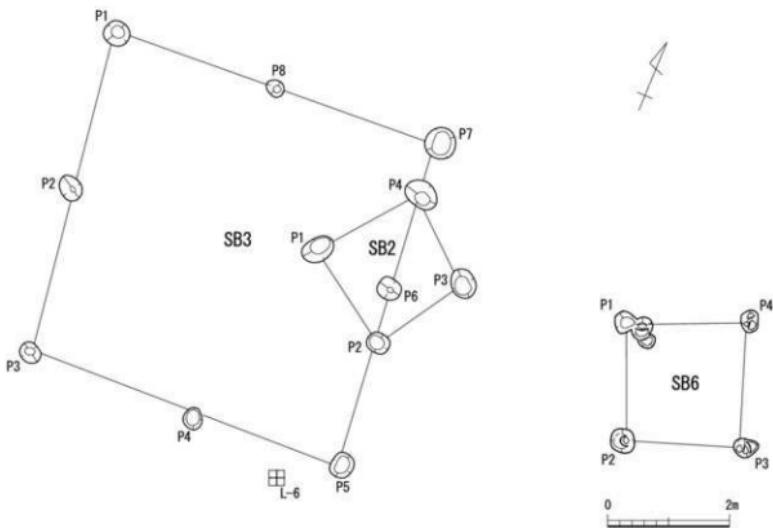
能性もある。K・L-8では井戸を検出したが、時期は近現代に属し、耕作地に伴う作業用の井戸と考えられる。

自然流路は幅の広い NR 1 ~ 5 のほかに、幅 1 m 以内で長さ 2 ~ 10 m 程度の自然流路を数多く確認している。これらの流路は砂利を含んだ黒褐色砂質土で埋積されており、流路の一部をトレンチ掘削したところ遺物を含むことはなかった。扇状地では上流から下流に向けて無数の小谷が基盤層を削りとっていくが、これらの細い流路も同様であろう。これらの遺構以外に、風倒木痕も多く確認している。風倒木痕は古代の可能性がある SB 1 の柱穴 1 基を滅失させていることから、古代以降に生育した樹木も含んでいるのだろう。

第3節 遺物の出土状況

遺物は、コンテナ 27 箱分が出土した。弥生時代の土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の須恵器・灰釉陶器、中世・近世・近現代の陶磁器が出土している。この中では古墳時代の土師器が大多数を占めている。調査区西側から中央にかけての出土遺物は極めて少なく、それとは対照的に NR 3・4・5 や調査区南東隅の遺物包含層からは多くの遺物が出土しており、本調査で出土した遺物のほとんどがこれらの地点から出土している。

田 K-6



第9図 SB 2・3・6配置図（縮尺1/80）

第4章 遺構

第1節 周溝をもつ建物

1) SI 1 (第10図)

E-11に位置する。建物の平面形は、遺構の半分が調査区壁外にあり、かつ周溝が途中で途切れているため全容が不明であるが、P 1-2を長軸とする隅丸長方形もしくは隅丸方形と推定する。長さは推定4.4mを測る。柱穴軸をもとにすると、建物の主軸方向はN-24°-Wである。周溝は20~30cm程の幅を持ち、深さは5cm程度を測る。柱間寸法は、P 1-2間に2.8mである。柱穴の平面形は円形や梢円形で、柱穴の断面形は平底形である。柱穴深度は12cmである。P 2から土器片が少量出土している。

2) SI 2 (第10図)

H-11に位置する。遺構の大部分が調査区壁外にあり、かつ周溝が後世の削平によって失われている。周溝内には3基の柱穴を検出したが、これは別の建物に伴う可能性がある。建物の全容は不明であるが、周溝西側が直線状に通るため、建物の平面形は隅丸長方形もしくは隅丸方形と推定する。周溝は幅43~70cm、深さ5~10cmを測る。周溝から土器片が少量出土している。

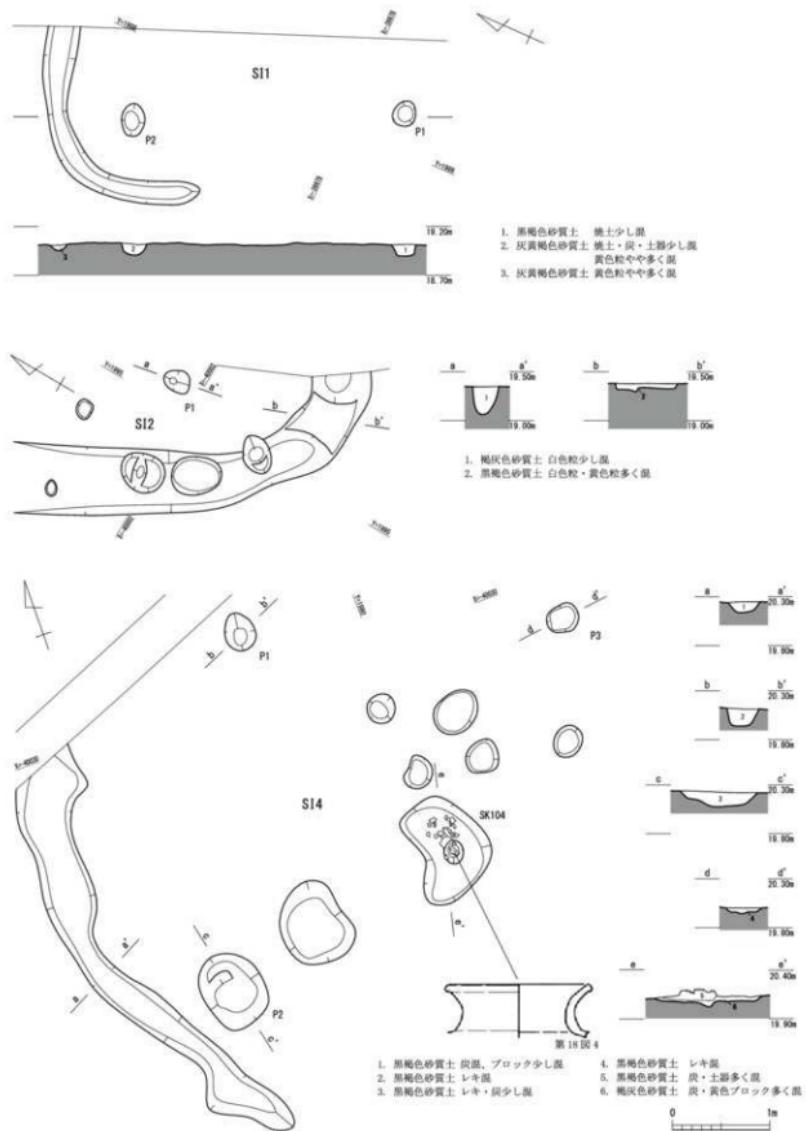
3) SI 3 (第11図)

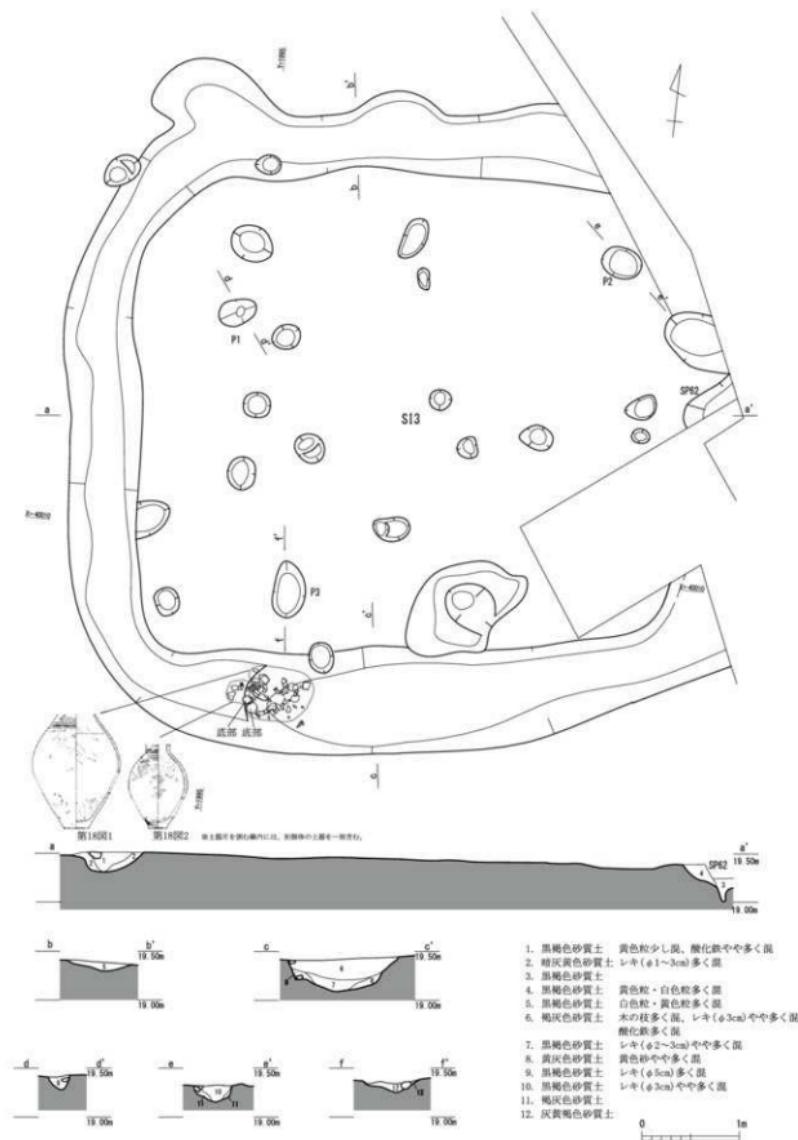
H・I-11に位置する。周溝の東辺が調査区外にあたるため全容は不明であるが、平面形は隅丸方形、規模は南北6.8m、東西推定6.5~7.0mを測る。周溝の方位軸はN-3°-W、柱穴列の方位軸はN-13°-Wであり、両者の方位軸は10度程度の差がある。周溝は50~110cm程の幅を持ち、深さは北辺で約10cm、西辺で約20cm、南辺で約30cmを測る。柱間寸法は、P 1-2間に3.9m、P 1-3間に3.0mである。柱穴の平面形は梢円形で、柱穴の断面形は丸底形や尖底形が多い。柱穴深度は9~17cmを測る。周溝内は南辺で上層に褐色砂質土、下層に黒褐色砂質土が堆積している。周溝南西隅から周溝南辺にかけて掘り込みが深くなっている、この箇所に弥生時代後期の土器が集中して出土した（第18図1・2）。二個体の底部が並べ置かれるように出土し、その東側に第18図1、西側に第18図2の破片が出土していた。遺構検出面に近いレベルから出土したため、後世の削平によって土器の一部が失われたと考えられるが、二個体の土器がまとまっていることから周溝内への廃棄状況を示していると推定する。周溝からはその他に甕や壺の土器片が出土している。第18図1・2の出土により、弥生時代後期の建物と推定する。

4) SI 4 (第10図)

J-8・9に位置する。約4.5m南北方向に延びる弧状の溝が建物の周溝と考えられるが、周溝の大部分および柱穴の一部が後世の削平によって失われている。周溝は30~70cm程の幅を持ち、深さは約10cmある。柱間寸法は、P 1-2間に3.7m、P 1-3間に3.3mである。柱穴の平面形は梢円形で、柱穴の断面形は平底形が多い。柱穴深度は6~17cmであり、P 2のみ柱穴が広く浅い形状をなしている。P 2や周溝からは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が主に出土している。

SK104は遺構の配置関係から、SI 4に伴う炉跡と推定する。長さ1.1m、幅0.7m、深さ10cmの規模を持ち、土坑埋土上層に炭やブロックが多く量に混じる黒褐色砂質土、下層に褐色砂質土が堆積する。特に上層には、壺（第18図4）をはじめとして甕などの土器が比較的まとまって出土していた。焼土の混入や床面の被熱痕は認められず、土坑周辺にも土器片が比較的多く出土したため、廃棄土坑の可能性もある。





第11図 SI 3 実測図 (縮尺1/50)

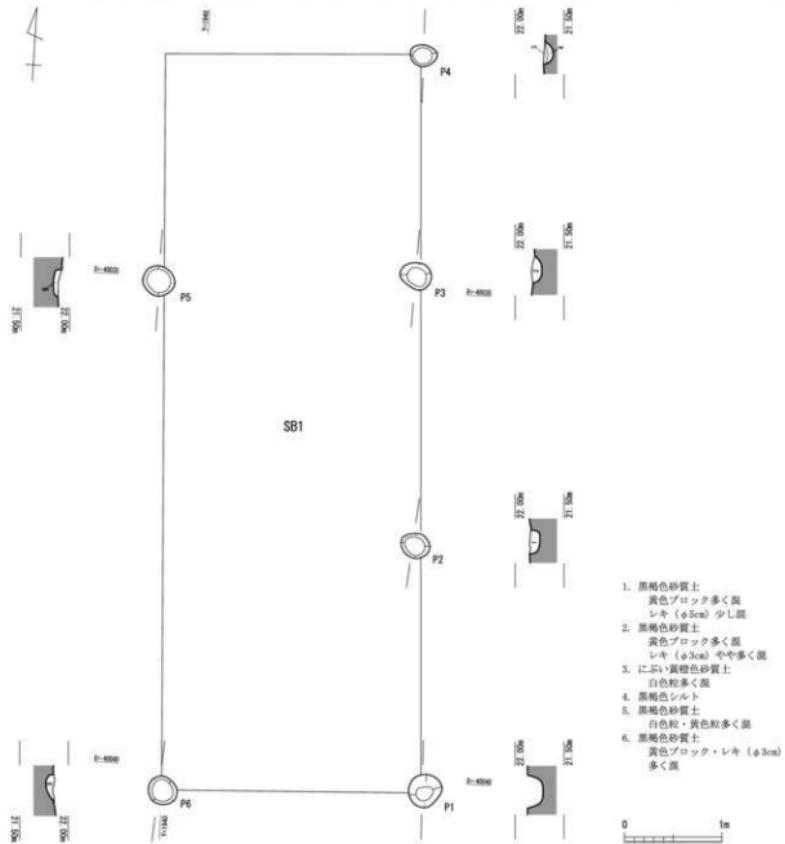
第2節 挖立柱建物

1) SB1 (第12図)

H・I-5に位置する。桁行3間 (7.6m)、梁行1間 (2.7m) の規模を持つ平面長方形の側柱建物である。建物の主軸方向はN-3°-Wである。西側桁行のうち、東側桁行に対応する2基の柱穴が欠けているが、P4に向かい側は落ち込み、P2に向かい側には風倒木痕を確認できたため、各々後世の削平により消失している。柱間寸法は、平側のP4-3間が2.3m、P3-2間が2.8m、P2-1間が2.5m、妻側のP1-6間が2.7mである。柱穴の平面形は主に円形や梢円形、柱穴の断面形は平底形や丸底形がある。柱穴深度は5~15cmを測る。本遺構から遺物は出土しなかった。

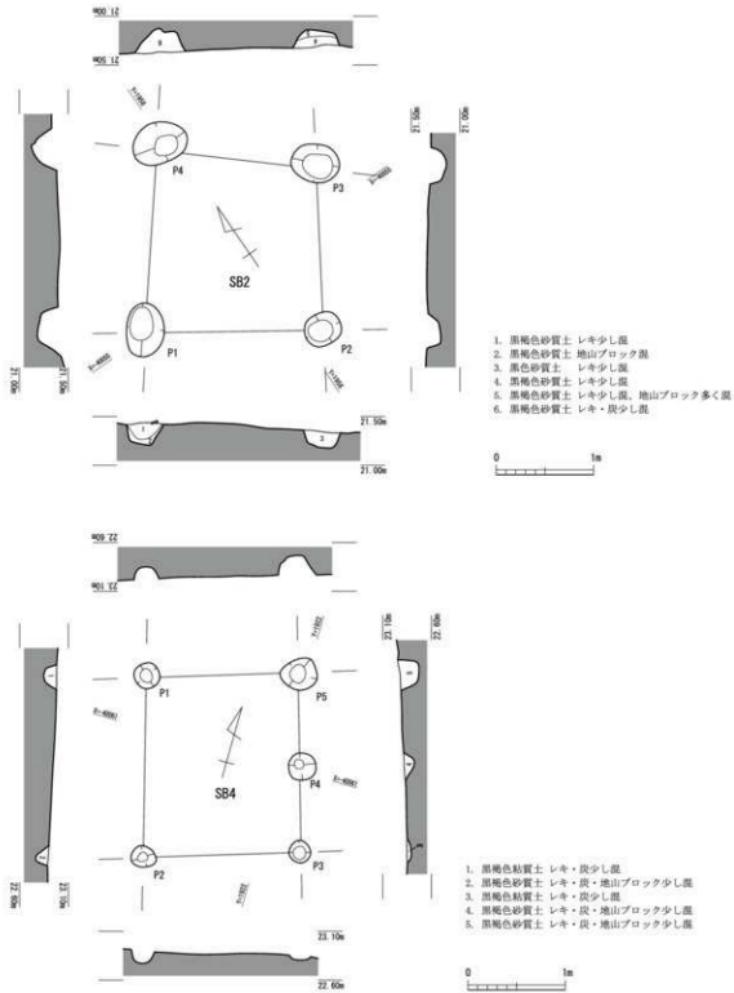
2) SB2 (第13図)

K-6に位置する。桁行1間 (1.9m)、梁行1間 (1.8m) の規模を持つ平面方形の側柱建物である。

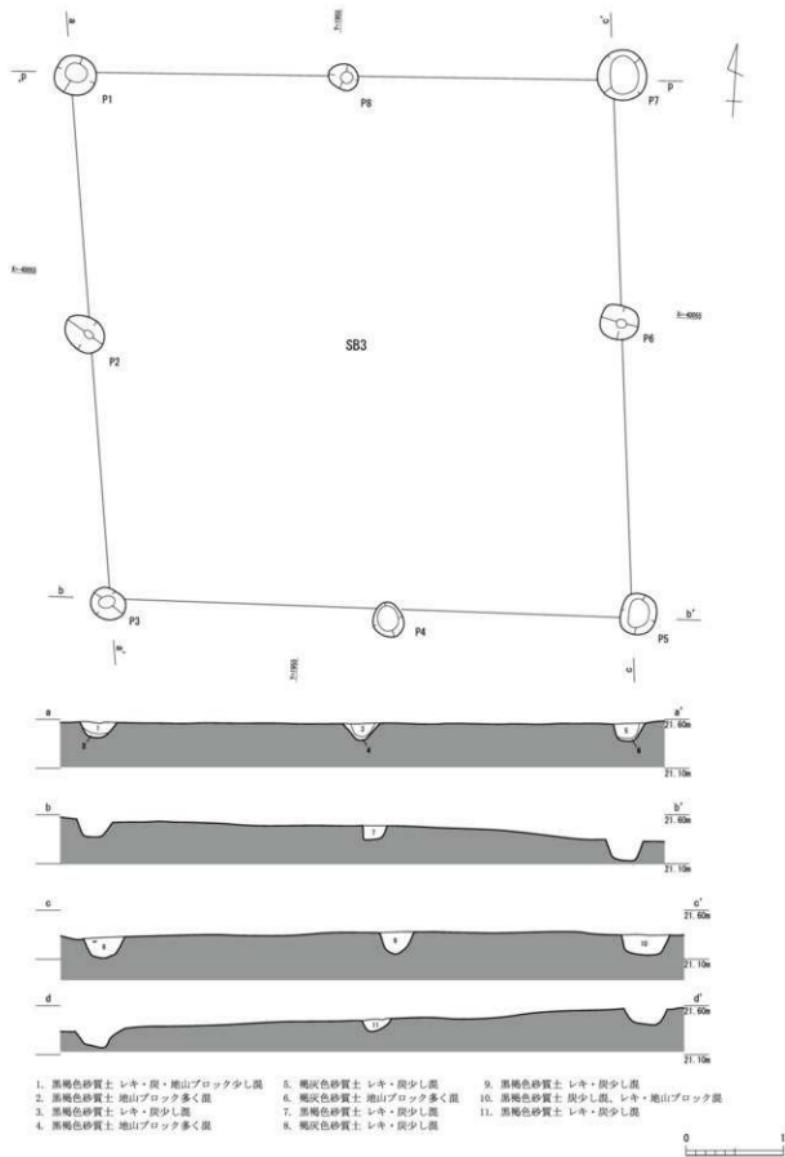


第12図 SB1 実測図 (縮尺1/50)

P 4 がやや北方向に外れており、ややいびつな四方形状をなす。建物の主軸方向はN-55°-Wである。柱間寸法は、P 1-2 間が1.8m、P 2-3 間が1.7m、P 3-4 間が1.6m、P 4-1 間が1.9mである。柱穴の平面形は主に楕円形、柱穴の断面形は主に平底形で、他に尖底形がある。柱穴径は40cm前後から50cm程度、柱穴深度は14~24cmであり、柱穴の規模は比較的大きい。P 3 からは9世紀の須恵器が出土している（第18図5）。検出した柱穴の全てで土器が出土しており、掘立柱建物の中では最も遺物量が



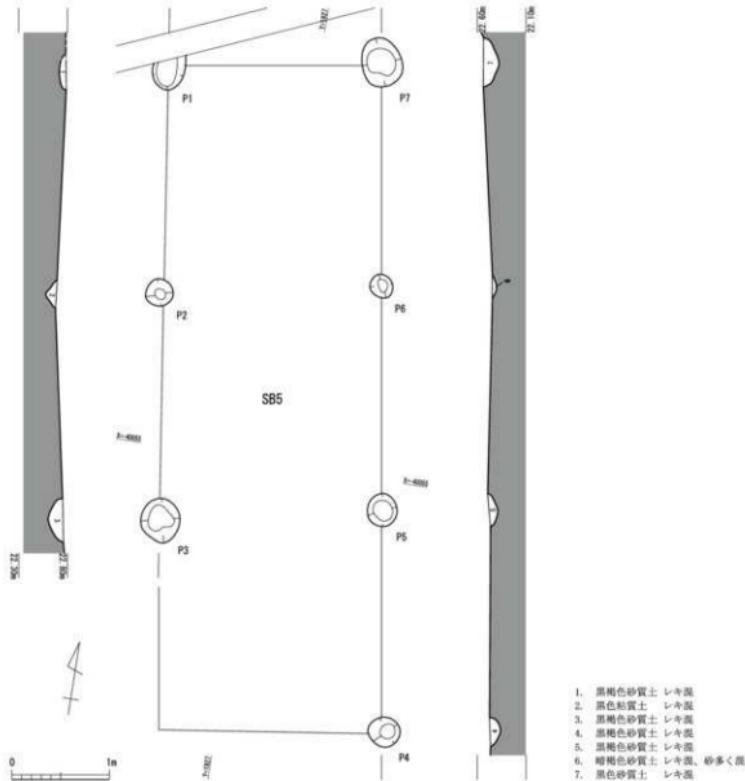
第13図 SB 2・4 実測図（縮尺1/50）



多い。SB3と切りあい関係にあるが、SB3との前後関係は不明である。出土遺物から、9世紀代の建物である可能性が高い。

3) SB3 (第14図)

K-5・6に位置する。桁行2間(5.5m)、梁行2間(5.5m)の規模を持つ平面方形の側柱建物である。南北方向の柱筋が全体に西側に傾いており、厳密には平行四辺形状といえる。この南北方向の柱筋を基準にすると、建物の主軸方向はN-6°-Wである。柱間寸法は、P1-2間が2.7m、P2-3間が2.7m、P3-4間が2.8m、P4-5間が2.5m、P5-6間が3.0m、P6-7間が2.5m、P7-8間が2.8m、P8-1間が2.8mであり、P5-6間のみ間口が広いものの、他は2.5~2.8mにおさまる。柱穴の平面形は主に円形や楕円形、柱穴の断面形は主に平底形で、他に丸底形がある。柱穴径はおおむね30cm~45cmに取まるが、P7のみ50cmを超えている。柱穴深度は12~20cmであり、柱穴同士の深さに比較的ばらつきは少ない。P3・5には埋め戻し土と考えられる褐色土が堆積していることからも、柱の抜き取りやは



第15図 SB5実測図 (縮尺1/50)

柱穴の埋め戻しが行われたと推定する。全ての柱穴から土器の小破片が出土しているが、P 3・6 からは9世紀の須恵器が出土している(第18図6・7)。SB2と切りあい関係にあるが、SB2との前後関係は不明である、出土遺物から、9世紀代の建物と推測する。

4) SB4 (第13図)

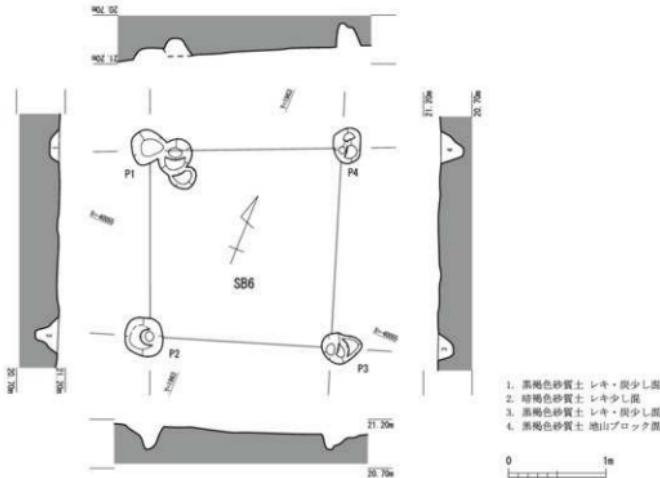
J-2に位置する。桁行1間・2間(1.8m)、梁行1間(1.6m)の規模を持つ平面長方形の側柱建物である。P 3-5間のみ2間であり、高床・床束建物ではないとするならば、P 4は扉や壁を支える間柱であったと推定する。建物の主軸方向はN-16°-Wである。柱間寸法は、P 1-2間が1.8m、P 2-3間が1.6m、P 3-4間が0.9m、P 4-5間が0.9m、P 5-1間が1.6mであり、大きなばらつきは見られない。柱穴の平面形は主に円形、柱穴の断面形は主に平底形で、他に尖底形がある。柱穴径は20~25cmにおおむねおさまるが、P 5は40cm近くある。柱穴深度は4~20cmであり、比較的ばらつきが認められる。本遺構から遺物は出土しなかった。

5) SB5 (第15図)

J-3に位置する。桁行3間(6.8m)、梁行1間(2.2m)の規模を持つ平面長方形の側柱建物である。P 4の向かい側のみ柱穴を確認していない。建物の主軸方向はN-9°-Wである。柱間寸法は、平側のP 1-2間とP 2-3間が各々2.3m、P 4-5間とP 6-7間が2.2m、P 5-6間が2.3m、妻側のP 1-7間が2.2mであり、すべての間が2.2~2.3mにおさまる。柱穴の平面形は主に円形や楕円形、柱穴の断面形は主に丸底形や尖底形で、他に平底形がある。柱穴径は25~35cmにおおむね収まるが、P 3やP 7は各々45cmと50cmある。柱穴深度は4~16cmであり、径の大きいP 3・7は深い。本遺構から遺物は出土しなかった。

6) SB6 (第16図)

K-6に位置する。桁行(2.0m)、梁行(2.0m)の規模を持つ平面方形の側柱建物である。P 1の東側に接するピットは、柱の立て直しの痕跡の可能性がある。建物の主軸方向はN-19°-Wである。柱間



第16図 SB6 実測図 (縮尺1/50)

寸法は、P 1-2間とP 2-3間が各々1.9m、P 3-4間とP 4-1間が2.0mである。柱穴の平面形は主に円形や楕円形で、柱穴の断面形は主に平底形である。柱穴深度は9~23cmで、P 2の埋土からは土器小片が少量出土する。

第3節 柱穴・土器集中遺構

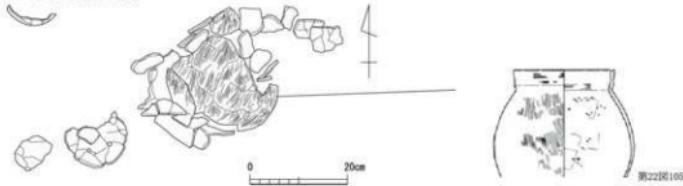
1) SP183 (第8図)

K-10に位置する。NR 4肩部で検出された柱穴である。西側にかけて複数の柱穴があるが、建物を構成するかどうかは不明である。平面形は楕円形、径30cm、深さ24cmを測る。埋土は黒褐色砂質土で、内部から土師器一個体がほぼ完形の状態で出土した(第18図9)。出土遺物から古墳時代前期の遺構と推測する。

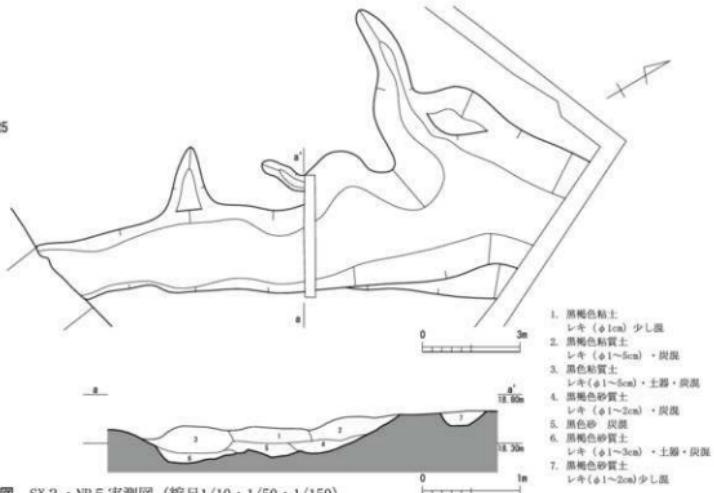
2) SX3 (第8・17図)

K-8に位置する。NR 4から東へ約10m離れている土器集中遺構である。基盤層直上で検出し北東-南西方向に広がる。遺物は土師器の壺(第22図105)や蓋などが出土し、土師器の壺は押しつぶされた状態である。周辺にはNR 4埋土に類似する黒褐色砂質土がこの付近まで薄く広がっていた。出土遺物から、古墳時代前期の土器捨て場の遺構と推測する。

SX3(出土状況平面図)



NR5



第17図 SX3・NR5 実測図(縮尺1/10・1/50・1/150)

第4節 自然流路

1) NR1 (第8図)

B-3～5に位置する。平面形は大きく蛇行しており、検出時の長さ約14m、幅約4～6m、深さ約40cmの規模を持つ自然流路である。上層に暗オリーブ褐色粘質土、中層に黒褐色粘質土、下層に暗灰黄色砂礫土が堆積する。遺物は主に上層から出土し、9・10世紀代の須恵器（第19図10～15）や11・12世紀代の白磁（第19図19）が出土する。出土遺物から、11・12世紀ごろにはほぼ埋没したと考えられる。

2) NR2 (第8図)

A-5～8、B-5～11、C-7～11に位置する。平面形はおおむね直線状で、検出時の長さ約60m、幅約10～16m、深さ約40cm以上の規模を持つ自然流路である。埋土掘削は上層のみにとどまったが、底面の高さは東ほど低いようである。埋土からは古代以前の須恵器のほか、17世紀ごろの擂鉢や近現代の陶磁器などが出土している。中世以前の遺物が少なかったため、近世～近現代に流路が形成・埋没したと推定する。

3) NR3 (第8図)

L-11に位置する。調査区南東隅で流路の肩を確認しており、検出時の長さ約8m、幅5m、深さ約40cmの規模を持つ自然流路である。NR4と同様に南西から北東方向に流れていたと考えられる。埋土からは古墳時代中・後期の土師器（第19図21～48）や9世紀代の須恵器（第19図49・50）が出土したほか、弥生土器も出土した。流路方向から旧五反田川の支流に相当するのだろう。また、礫や砂が多く混じるため、洪水などによる短期的な埋積であり、9世紀には埋没したと推定する。

4) NR4 (第8図)

I・J-10・11、K-9～11、L-9・10に位置する。平面形は大きく蛇行しており、検出時の長さ約30m、幅5m、深さ10～30cmの規模を持つ自然流路である。底面の高さは南から北方向に向かって低くなる。流路埋土は炭や焼土、黄色粒が混じる黒褐色砂質土で、一部の流路肩部には褐色砂質土が堆積する。埋土からは弥生土器（弥生時代後期）や土師器（古墳時代前期）、灰釉陶器・白磁など（10～12世紀）が出土しており、流路東側で遺物が多く出土している。弥生時代後期や古墳時代前期の土師器が主に出土することから、弥生時代後期には流路が埋没しつつあり、12世紀までにはほぼ完全に埋没したものと推定する。また、流路内には古墳時代前期の土器を廃棄した痕跡がいくつかあり、J-11では布留系の土器がほぼ1個体分出土した（第20図53、図版第15（5））。このことから、古墳時代前期には土器廃棄の場として利用された可能性がある。

5) NR5 (第8・17図)

A・B-10・11に位置する。平面形はおおむね直線形だが、二又に分かれる箇所がありかつ底面形状も安定していない。検出時の長さ約15m、幅2～6m、深さ約40～60cmの規模を持つ自然流路である。流路南西側はNR2によって削平されている。底面の高さは南から北に向かって低くなる。流路埋土は上層に黒褐色粘質土、下層に黒褐色砂質土が堆積する。下層と比べると上層から大量の遺物が出土しているが、両層とも遺物の時期は変わらない。埋土からは古墳時代中期の土師器（第21図77～94など）のほか、弥生時代後期の土器（第20図67など）も出土する。出土遺物から、弥生時代後期から古墳時代中期にかけて堆積が進んだと考えられる。小破片の出土品が非常に多いため、多くの土器が上流から流れ込んだと考えられるが、破片の多くは二次的移動に伴う磨耗をあまり確認できないため、廃棄場所は調査区からあまり遠くはない場所と推定する。

第5章 遺物

本章では、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、古代、中世の遺物について述べる。遺構埋土以外の遺物包含層からの出土遺物は小破片が多く、復元できない資料が多かったため、自然流路を中心とした遺構からの出土遺物を主に取り上げた。また、各個体の詳細については実測図や遺物観察表を参照されたい。

第1節 遺構内出土遺物

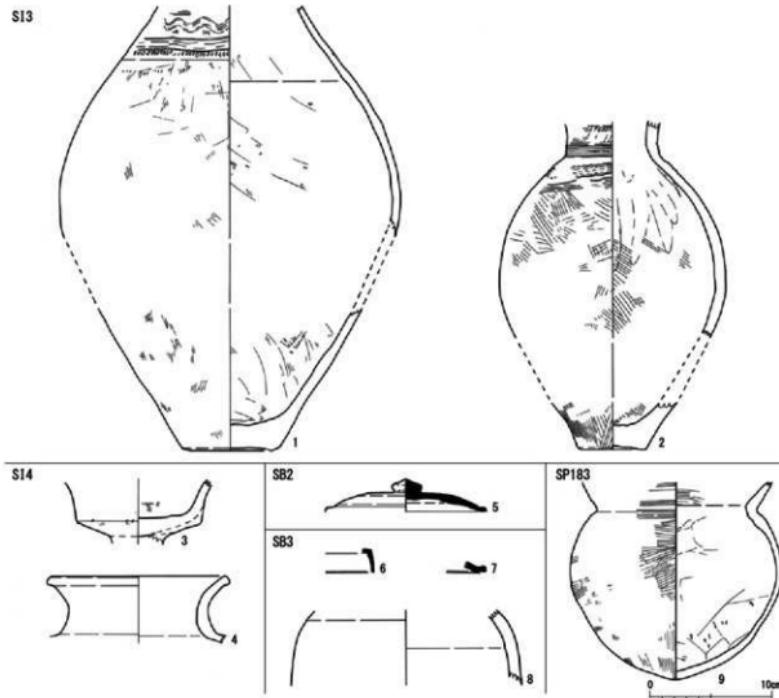
1 周溝をもつ建物

1) SI 3 出土遺物 (第18図 1・2)

1・2は弥生時代後期前半の土器である。口頸部と胴部は接合しないが、いずれも長胴形の壺と推定する。頸部と体部上半に櫛描きの波状文や直線文を巡らし、1は櫛描文下に刻目を施す。

2) SI 4 出土遺物 (第18図 3・4)

3・4は弥生時代後期の土器だが、3は古墳時代初頭まで下る可能性がある。



第18図 遺構内出土土器・陶器実測図 (縮尺1/4)

2 挖立柱建物

3) SB2出土遺物 (第18図5)

5はP3から出土した9世紀の須恵器坏蓋である。外面には回転ナデ・ヘラ削りを確認できる。

4) SB3出土遺物 (第18図6~8)

6はP3、7はP6、8はP7から出土し、6・7は9世紀の須恵器の蓋で外面は回転ナデが残る。

8は灰釉陶器の長頸瓶で外面が薄く刷毛塗りされる。6・7と同様に9世紀ごろの可能性がある。

3 柱穴

1) SP183出土遺物 (第18図9)

9は古墳時代前期の土師器である。外面に刷毛目調整が行われ、底部は丸底形に成形される。

4 自然流路

1) NR1出土遺物 (第19図10~19)

10~13・15は9・10世紀、14は10・11世紀、16は10世紀、19は11・12世紀である。10~13・15は須恵器坏で、底面に回転ヘラ切り痕(12・13)がある。14・16は灰釉陶器で、16の高台は低平な三日月形である。17・18は製埴土器で、表面は赤褐色を呈する。19は白磁碗で口縁端部を肥厚させる。

2) NR3出土遺物 (第19図20~50)

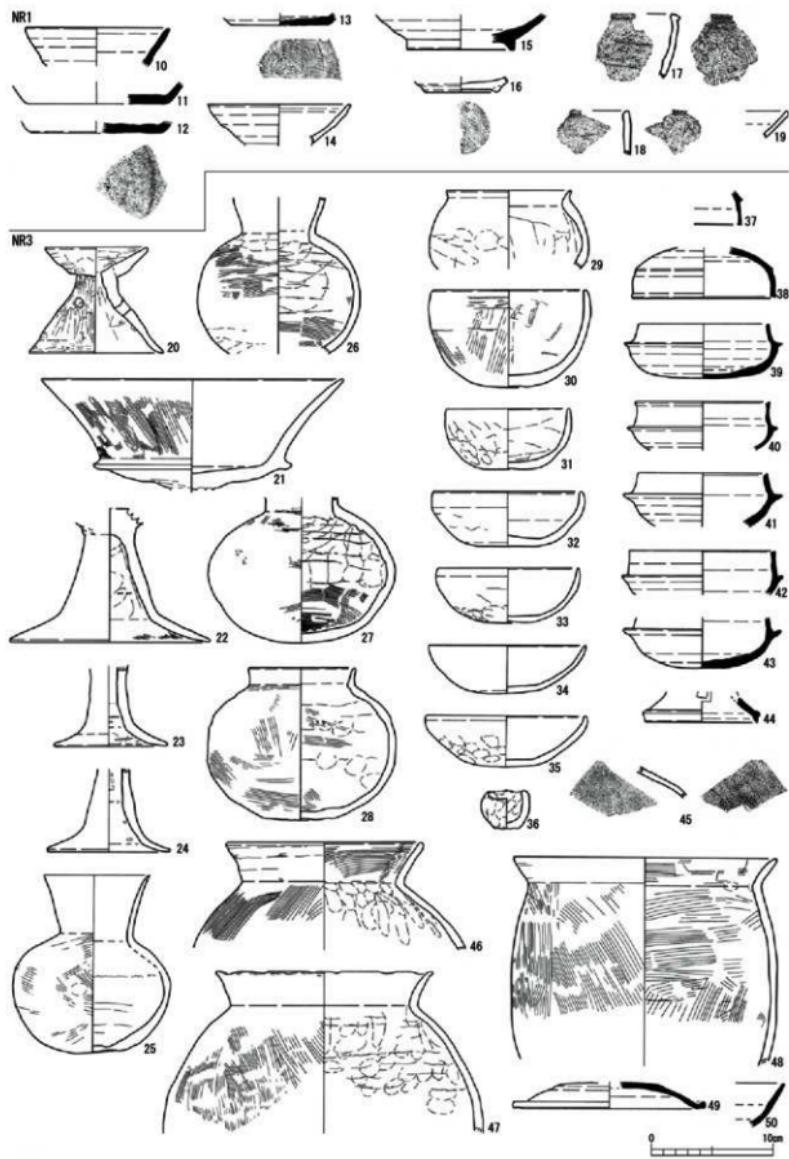
20は古墳時代前期、26~47は古墳時代中・後期、48~50は9世紀ごろの土器である。20は土師器の器台で、脚部に三方透かしを持つ。21~24は土師器の高坏で、21は口縁部下に突帯を巡らしている。25~28は小型の壺である。28のみ口縁部幅が短く、体部はやや粗雑なつくりである。29は口縁部を屈曲させた鉢である。30~35は土師器の坏で、30は体部が深い作りである。36は容器型土製品で全体に粘土を貼り合わせた痕跡が残る。37・38は須恵器の坏蓋、39~43は須恵器の坏身である。44は須恵器の高坏脚部で四方透かしと考えられる。形態的特徴から、37・39~42・44はTK208~TK23(5世紀後半)、38・43はTK10前後(6世紀)と推定する。45は陶質土器の壺体部で表面はナデ調整される。古墳時代中期とみられる。46~48は土師器の壺で、48は長胴形を呈し、内外面とも刷毛目がよく残っている。49は須恵器の坏蓋、50は須恵器の坏である。

3) NR4出土遺物 (第20図51~61)

51~54は古墳時代前期の土師器、55~61は9~12世紀の遺物である。51は器台、52は片口鉢である。53は体部削りによって薄く仕上げている。55~58は灰釉陶器で、55は輪花碗、58は三日月高台を持つ皿である。59・60は白磁の碗と皿で、59の口縁端部は肥厚する。61はクロロ土師器で底面に回転糸切り痕を残す。

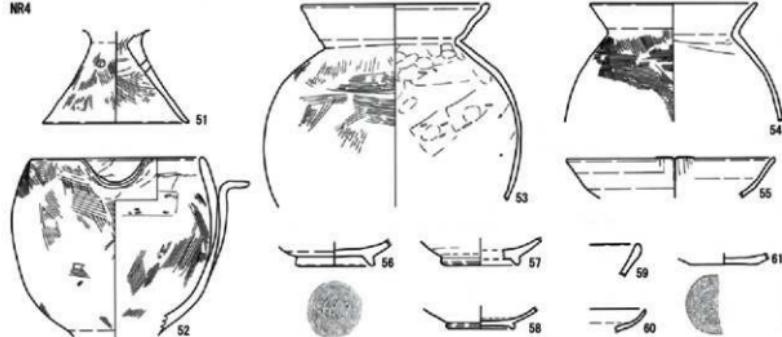
4) NR5出土遺物 (第20~22図62~104)

62~76は弥生時代後期~古墳時代前期の土器である。62は台付鉢で把手が外れているが、口縁部に1条の回線文を巡らす。63~67の壺のうち、63~65は口縁部に不明瞭な擬回線を施す。66は「く」の字形の口縁、67は頸部が「ハ」の字形に開く細頸壺である。68は器台、69・70は蓋である。壺(71~76)は、受け口形口縁部を持つ(71・72・74)などの様々な口縁形態がある。62・67・71・72・74は弥生時代後期、63~65・75は弥生時代終末~古墳時代初頭、66・68・73・76は古墳時代前期と推定する。77~104は主に古墳時代中期の土器で、77~87は土師器の高坏である。坏部は「ハ」の字形に開き、脚部本体が膨らみを持ち脚部据が屈折するものが多い。88~91は小型壺でどれも丸底を呈する。92・93は小型の鉢で92は口縁部が屈曲する。94は容器型土製品で口縁部が薄い作りである。95は内湾する口縁部に鋭利な

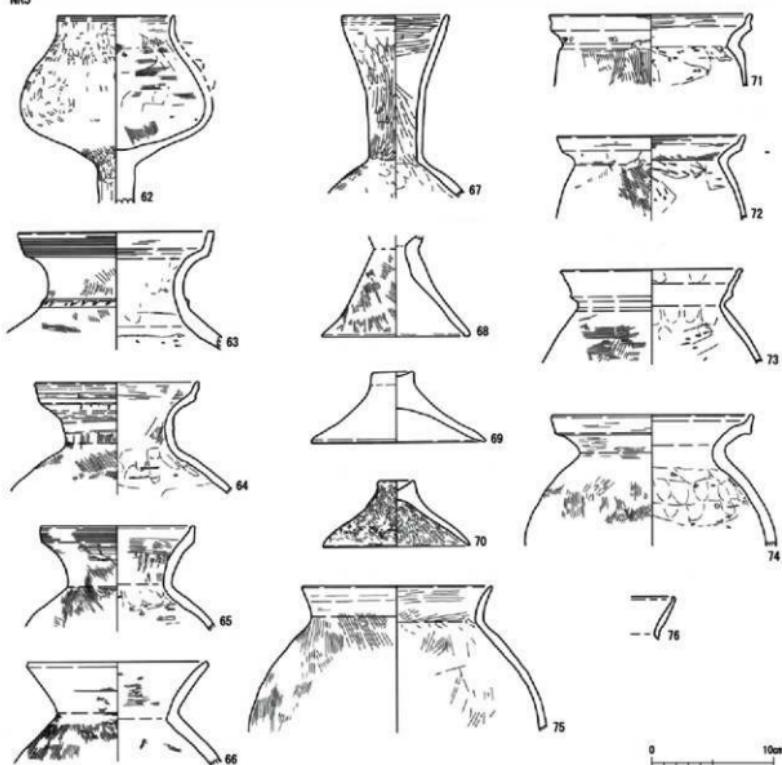


第19図 NR 1・3 出出土器・陶器実測図（縮尺1/4）

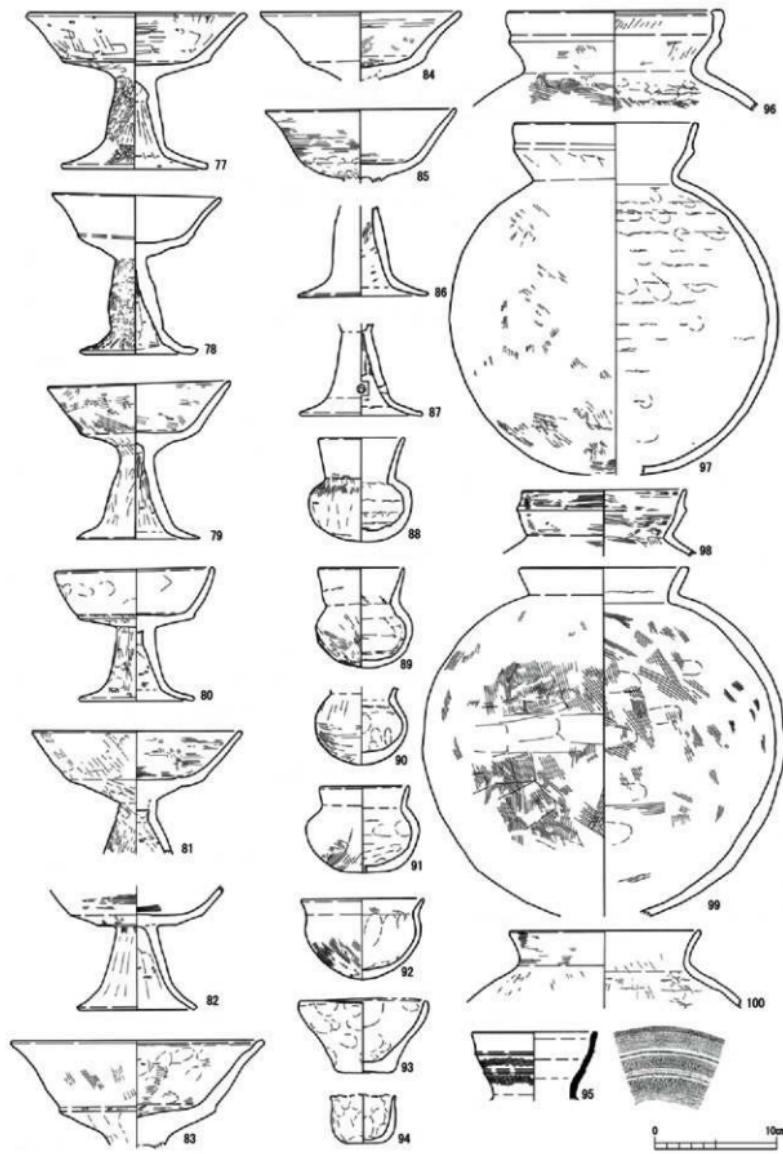
NR4



NR5



第20図 NR 4・5 出出土器・陶器実測図（縮尺1/4）



第21図 NR 5 出土土器実測図（縮尺1/4）

稜線と櫛描波状文を交互に巡らす。提瓶に似るが、口径約10cmを測ることから須恵器の短頸壺で、5世紀後半から6世紀初め頃の時期であろう。96~100は土師器の壺で96~98は口縁帯を作る。97は磨耗が著しいが、体部に刷毛目を確認できる。99・100は体部が大きく張る。99は内外面ともに刷毛目がよく残っている。101~104は土師器壺で外面に煤が付着する土器が多い。

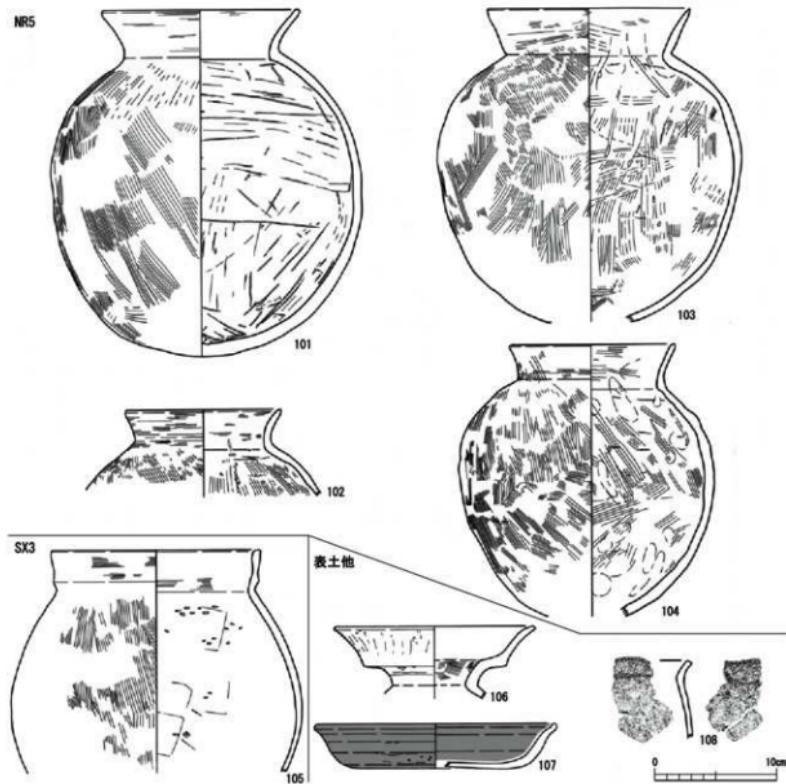
5 土器集中遺構

1) SX3出土遺物 (第22図105)

105は古墳時代前期の土師器で、口縁部に横方向の刷毛目、体部に縦方向の刷毛目で調整される。

第2節 遺構外出土遺物 (第22図106~108)

106は古墳時代前期の二重口縁をもつ壺である。107は8世紀ごろのロクロ土師器である。内外面が赤彩される。底面はヘラ切り後にナデ調整されている。108は形態等の特徴から9・10世紀ごろの製塩土器である。



第22図 NR 5・SX3他出土土器実測図 (縮尺1/4)

第4表 出土遺物観察表

遺物 番号	グリッド	遺物名	種別	器種	重量 (cm)			施文・調整		色調		焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	111	S13 周溝	弥生 土器	盃	—	8.0	—	体部：縦ハケ、ナデ 肩部：櫛目波状文・直巻文・円点文	体部：斜めハケ	明赤褐色	明赤褐色	やや 不良	
2	111	S13 周溝	弥生 土器	盃	—	5.3	—	腹部：斜めハケ後横ナ テ、櫛目波状文 体部：ハケ後ミガキ、肩 に櫛塔波状文・直巻文 底部：ナデ	体部上半：縦ナデ 体部下半～底部：斜めハ ケ	に赤い橙色	浅黄褐色	良	
3	J8	S14 周溝	土器類	高杯	—	—	—	ハケ後ナデ 牙根部：無接列点文	ナデ	橙色	に赤い橙色	良	
4	J9	S14 (SK104)	土器類	盃	14.2	—	—			橙色	橙色	良	摩滅
5	K6	SB2-P3	須恵器	壺蓋	(13.2)	—	(2.7)	回転ナデ・ヘラ削り	回転ナデ	灰白色	灰白色	良	
6	K6	SB3-P3	須恵器	壺蓋	—	—	(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良	削痕の有
7	K6	SB3-P6	須恵器	壺蓋	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良	
8	K6	SB3-P7	須恵器	長瓶瓶	—	—	—	体部：回転ナデ、灰釉 体部：回転ナデ	に赤い黄褐色	灰白色	良		
9	K10	SP183	土器類	甕	—	—	—	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ	口縁部：横ナデ 体部：ケズリ後ナデ	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	良	外表面保 付着
10	B5	NRI	須恵器	壺	(11.7)	—	—	牙部：回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良	
11	B5	NRI	須恵器	壺	—	(11.2)	—	底部：回転ナデ 底部：回転ヘラ切り後ナ デ	底部：回転ナデ	灰色	灰色	良	
12	B5	NRI	須恵器	壺	—	(10.5)	—	牙部：回転ナデ 底部：回転ヘラ切り後ナ デ	底部：回転ナデ	灰色	灰色	良	
13	B5	NRI	須恵器	壺	—	(8.0)	—	牙部：回転ナデ 底部：回転ヘラ切り	底部：回転ナデ	灰色	灰色	良	
14	C4	NRI	灰陶 陶器	壺	—	(12.0)	—	牙部：回転ナデ	回転ナデ	灰黄色	灰黄色	良	ベタ高台
15	B5	NRI	須恵器	壺	—	(8.7)	—	牙部：回転ナデ	牙部：回転ナデ 牙部：ナデ	黄灰色	黄灰色	良	高台接地面 に压痕
16	B5	NRI	灰陶 陶器	壺	—	(6.0)	—	牙部：回転ナデ 底部：回転系切り後回転 ナデ	回転ナデ	灰黄色	灰黄色	良	
17	B5	NRI	須恵器	壺	—	—	—	ナデ。ケズリ	横ナデ	赤褐色	赤褐色	良	
18	B5	NRI	須恵器	壺	—	—	—	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	良	
19	B5	NRI	白磁	直	—	—	—	口縁部：玉縁にやや肥厚、 白磁釉	白磁釉	灰白色	灰白色	良	
20	L11	NR3	土器類	器台	8.3	11.0	8.8	牙部：横ミガキ 脚部：縦ミガキ 脚部刷：横ミガキ	脚部：横ミガキ 脚部：横オサエ 脚部刷：横ミガキ	橙色	橙色	良	3方透 (幾 成前透孔・ 円崩)
21	L11	NR3	土器類	高杯	(24.9)	—	—	口縁部：横ナデ、底ハ ク 牙部：ナデ、突幣	口縁部：横ナデ 脚部基：横オサエ 脚部：横ミガキ 脚部刷：横ナデ	浅黄褐色	に赤い橙色	やや 良	内外表面 着
22	L11	NR3	土器類	高杯	—	16.2	—	脚部刷：横ナデ	横ナデ	橙色	橙色	良	
23	L11	NR3	土器類	高杯	—	9.4	—	脚部：横ミガキ 脚部刷：横ナデ	脚部：横ミガキ 脚部刷：横ナデ	橙色	に赤い橙色	良	
24	L11	NR3	土器類	高杯	—	9.8	—	脚部刷：横ナデ	横ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	良	
25	L10+ 11	NR3	土器類	盃	(8.7)	—	14.8	体部：ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	不良	
26	L10+ 11	NR3	土器類	盃	—	—	—	体部：ミガキ 体部：ハケ後ミガキ	体部上半：指オサエ 体部下半：横ハケ	橙色	に赤い橙色	良	
27	L11	NR3	土器類	盃	—	—	—	体部：ハケ後ナデ	体部：横ハケ、ナデ	橙色	に赤い黄褐色	良	
28	L11	NR3	土器類	盃	(8.6)	(7.6)	12.6	口縁部：横ナデ 底部：ナデ 底部：指オサエ	ハケ、ナデ	に赤い黄褐色	明褐灰褐色	やや 不良	
29	L10+ 11	NR3	土器類	鉢	(10.2)	—	—	口縁部：横ナデ 体部：ミガキ	口縁部：横ナデ 体部：ナデ	に赤い橙色	に赤い橙色	やや 良	
30	L11	NR3	土器類	鉢	(12.5)	—	8.0	口縁部：横ナデ 体部：ハケ後ナデ 底部：ナデ	口縁～体部：板ナデ 底部：ナデ	灰白色	灰白色	やや 良	
31	L11	NR3	土器類	鉢	(10.2)	—	5.0	口縁部：横ナデ 体部：ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ナデ	に赤い橙色	灰白色	やや 良	外表面被熱
32	L11	NR3	土器類	鉢	(12.2)	—	4.5	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	良	
33	L11	NR3	土器類	鉢	(11.6)	—	4.5	ナデ	ナデ	に赤い黄褐色	灰白色	やや 良	

遺物 番号	グリッド	遺構名	種別	基種	測量 (cm)			施文・調整		色調		焼成	備考
					口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		
34	L10-11	NR3	土師器	坪	(12.9)	—	4.0	口縁部：横ナデ 体部～底部：ナデ、ケズリ	ミガキ	褐色	褐色	良	内面剥離痕
35	L11	NR3	土師器	坪	(13.2)	—	4.2	口縁部：横ナデ 体部：指オサエ 底部：ナデ	ミガキ	褐色	褐色	良	
36	L11	NR3	土製品 土製品	容器型 土製品	3.0	1.8	3.2	ナデ	ナデ	灰白色	にぶい褐色	やや 不良	手捏ね
37	L11	NR3	須恵器	坪壠	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	黄灰色	やや 不良	
38	L11	NR3	須恵器	坪壠	(11.8)	—	(4.2)	天井部：回転ヘラケズリ 口縁部：回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	やや 良	
39	L11	NR3	須恵器	坪身	(10.6)	(8.6)	4.5	口縁～坪部：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ	口縁～坪部：回転ナデ 底部：ナデ	灰色	灰色	良	
40	L11	NR3	須恵器	坪身	(11.0)	—	—	口縁～坪部：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	灰色	やや 不良	
41	L11	NR3	須恵器	坪身	(10.6)	—	—	口縁～坪部：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	灰色	やや 良	
42	L11	NR3	須恵器	坪身	(12.0)	—	—	口縁部：回転ヘラナデ 坪部：回転ナデ 底部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	灰色	やや 良	
43	L7+8	NR3	須恵器	坪身	—	(5.6)	(4.2)	坪部：回転ナデ 底部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	灰黄色	不良	
44	L11	NR3	須恵器	高坪	—	(9.2)	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	やや 良	4方透（透 孔2か所）
45	L11	NR3	陶質土器	壺	—	—	—	ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	良	器壁断面茶褐色
46	L11	NR3	土師器	壺	16.0	—	—	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ	口縁部：横ナデ 体部：指オサエ、窓ナデ	灰白色	灰白色	やや 不良	
47	L11	NR3	土師器	壺	(17.8)	—	—	体部：斜めハケ	体部：指オサエ	灰白色	灰白色	不良	
48	L11	NR3	土師器	壺	(21.6)	—	—	口縁部：横ハケ 体部：窓ナデ	口縁部上半：横ハケ 体部上半：窓ナデ 体部下半：斜めハケ	灰白色	浅黃褐色	不良	
49	L10-11	NR3	須恵器	坪壠	(14.4)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	やや 良	
50	L10-11	NR3	須恵器	坪	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	やや 良	
51	K11	NR4	土師器	湯台	—	(12.0)	—	脚部：ハケ後縦ミガキ	脚部：斜めハケ、ケズリ 脚部横：横ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	3方透（透 底底透孔。 図示) EII 3X1
52	J11	NR4	土師器	片口鉢	14.2	—	—	体部上半：斜めハケ 体部下半：斜めハケ後ナデ	体部上半：横ケズリ 体部下半：斜めハケ	浅黃褐色	にぶい黄褐色	良	
53	J11	NR4	土師器	壺	15.1	—	—	口縁部：横ナデ 体部：横・斜めハケ	口縁部：横ナデ 体部：横ケズリ	明赤褐色	明赤褐色	良	外側剥離 EII 3X4
54	K9+10	NR4	土師器	壺	(13.6)	—	—	口縁部：横ナデ 体部：横・斜めハケ	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ後ナデ	橙色	橙色	良	EII 5X2
55	—	NR4	陶器	輪花瓶	(17.2)	—	—	回転ナデ、輪花	回転ナデ、自然釉	灰白色	灰白色	良	
56	J11	NR4	灰釉 陶器	碗	—	5.9	—	体部：回転ナデ 底部：回転ヘラ切り 墨付け高台	回転ナデ、自然釉	灰白色	灰白色	良	打欠き痕
57	—	NR4	灰釉 陶器	碗	—	(6.0)	—	体部：回転ナデ 墨付け高台	回転ナデ、灰釉	灰白色	灰白色	良	打欠き痕
58	J10-11	NR4	灰釉 陶器	壺	—	(6.3)	—	体部：回転ナデ 底部：回転ヘラ切り後ナデ 墨付け高台	回転ナデ、灰釉	灰白色	灰白色	良	
59	J10-11	NR4	白磁	碗	—	—	—	口縁部：玉縁に肥厚 白磁	白磁	白色	白色	良	
60	—	NR4	白磁	壺	—	—	—	口縁部：白磁 体部：回転ナデ、輪花	回転ナデ、段状の界線。 白磁	灰白色	浅黃色	良	
61	—	NR4	ロクロ 土師器	壺	—	(5.4)	—	底部：回転条切り	回転ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	やや 良	
62	B10, A+B11	NR5	青生 土器	台付鉢	(9.6)	—	—	口縁部：窓ミガキ、回転 奈 体部：窓ミガキ。把手側 底部：窓ミガキ	口縁部：横ナデ 底部：ハケ、ナデ 底部：ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	
63	B10, A+B11	NR5	青生 土器	壺	16.1	—	—	口縁部：窓ミガキ。斜め 奈 体部：窓ミガキ。把手側 底部：窓ミガキ	口縁部：横ナデ 底部：ナデ 体部：横ケズリ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	

遺物 番号	グリッド	遺構名	種別	基種	流量 (dm)			施文・撰書			色調		焼成	備考
					口径	底径	基高	外面	内面	外面	内面			
64	B10, A+B11	NRS	陶生土器	壺	(13.4)	—	—	口縁部：縫凹線 2 条 瓶底上半：彌掛直線文 瓶底下半：体部：斜めハケ 瓶底に腹方向の溝痕 3 本	口縁部：横ナデ 瓶底：ナデ、ハケ 体部：ケズリ、指オサエ	明赤褐色	明赤褐色	良		
65	B10, A+B11	NRS	陶生土器	壺	(12.6)	—	—	口縁部～瓶底上半：彌掛直線文 瓶底下半～体部：斜めハケ	口縁部：横ナデ 瓶底：横ハケ 体部：横ケズリ	に赤い褐色	に赤い褐色	良		
66	B10, A+B11	NRS	土師器	壺	(14.8)	—	—	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ	口縁部：横ナデ、ハケ 体部：斜めハケ	に赤い褐色	に赤い褐色	良		
67	B10, A+B11	NRS	陶生土器	壺	(8.5)	—	—	口縁部～瓶底上半：彌掛直線文 口縁～体部：縦ミガキ	口縁部：横ミガキ 瓶底：指オサエ 体部：ナデ、指オサエ	に赤い褐色	褐色	良		
68	B10, A+B11	NRS	土師器	器台	—	8.3	—	斜めハケ	ハケ、ナデ	褐色	褐色	やや不良		
69	B10, A+B11	NRS	陶生土器・土師器	壺	14.2	—	5.9	ミガキ		明赤褐色	明赤褐色	やや不良	摩滅	
70	B10, A+B11	NRS	陶生土器・土師器	壺	11.9	—	5.4	ハケ後ミガキ	ミガキ	に赤い褐色	に赤い褐色	良	外表面付着	
71	B10, A+B11	NRS	陶生土器	壺	(16.5)	—	—	口縁部：横ナデ 体部：鏡ハケ	口縁部：横ハケ後横ナデ 体部：ケズリ	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	良	外表面付着	
72	B10, A+B11	NRS	陶生土器	壺	(15.5)	—	—	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ（工具痕）	口縁部：横ハケ後横ナデ 体部：斜めケズリ	に赤い褐色	に赤い褐色	良	外表面付着	
73	B10, A+B11	NRS	土師器	壺	(14.8)	—	—	口縁部：横ナデ 体部：横・斜めハケ	口縁部：横ナデ 体部：横ケズリ	に赤い褐色	に赤い褐色	やや良	外表面付着	
74	B10, A+B11	NRS	陶生土器	壺	(16.4)	—	—	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ	口縁部：横ナデ 体部：横ケズリ、指オサエ	に赤い褐色	に赤い褐色	良	外表面付着	
75	B10, A+B11	NRS	土師器	壺	15.6	—	—	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ	口縁部：横ハケ 体部：ハケ、ケズリ、指オサエ	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	良		
76	B10, A+B11	NRS	土師器	壺	—	—	—	横ナデ	横ハケ	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	良		
77	B10, A+B11	NRS	土師器	高坏	(17.8)	11.6	12.9	口縁部：横ナデ 体部：指オサエ、ナデ 脚部：縦ミガキ	口縁部：横ナデ 体部：ミガキ 脚部：横ケズリ 脚部附：横ナデ	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	良	外表面剥離 内部付着	
78	B10, A+B11	NRS	土師器	高坏	15.2	9.8	14.3	口縁部：横ナデ 体部：指オサエ、ハケ 脚部：縦ミガキ	口縁部：横ナデ 体部：横ケズリ 脚部：横ナデ	灰白色	浅黄色	良		
79	B10, A+B11	NRS	土師器	高坏	15.0	12.0	13.1	口縁部：斜めハケ後ミガキ 体部：ミガキ	口縁部：ハケ 体部：横ケズリ	浅黄褐色	浅黄褐色	やや良		
80	B10, A+B11	NRS	土師器	高坏	12.9	9.2	11.1	口縁部：斜めミガキ、ナデ 体部：ミガキ	口縁部：横ハケ後横ミガキ 体部：横ケズリ、横ナデ	灰黄色	灰黄褐色	やや良		
81	B10, A+B11	NRS	土師器	高坏	(17.2)	—	—	口縁部：斜めミガキ 体部：ナデ	口縁部：横ハケ、ナデ 脚部：ケズリ、ナデ	灰白色	灰白色	不良		
82	B10, A+B11	NRS	土師器	高坏	—	(9.4)	—	口縁部：横ハケ後ナデ 体部：ナデ 脚部：縦ミガキ	口縁部：ハケ後ナデ 脚部：横ケズリ、ナデ	に赤い褐色	灰黄褐色	やや良		
83	B10, A+B11	NRS	土師器	高坏	(26.0)	—	—	口縁部：横ハケ 脚部：指オサエ、ナデ	横ハケ、ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	良		
84	B10, A+B11	NRS	土師器	高坏	(16.6)	—	—	口縁部：横ナデ 体部：指オサエ、ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ハケ	浅黄褐色	浅黄褐色	良		
85	B10, A+B11	NRS	土師器	高坏	(15.8)	—	—	口縁部：横ナデ 体部：指オサエ、ナデ	横ハケ、ナデ	灰白色	灰白色	良		
86	B10, A+B11	NRS	土師器	高坏	—	10.4	—		ハケ	灰白色	灰白色	やや不良		

遺物 番号	グリッド	遺構名	種別	基準	重量(gm)			施文・調整		色調		焼成	備考		
					口径	底径	基高	外面		内面					
								外	内	外	内				
87	B10, A- B11	NRS	土師器	高杯	-	(10.0)	-	ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	やや良	焼成前透孔 1(円形)		
88	B10, A- B11	NRS	土師器	盃	7.0	-	8.6	口縁部：横ナデ・ハケ、 指オサエ 体部：斜めハケ後ミガキ	口縁部：横ナデ 体部：ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良			
89	B10, A- B11	NRS	土師器	盃	7.4	-	9.0	口縁部：横ナデ 体部：横ケズリ、ナデ	口縁部：横ナデ 体部：横ケズリ、ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	外面保付着		
90	B10, A- B11	NRS	土師器	盃	-	-	-	体部：ハケ後ナデ	体部：指オサエ、ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	外面保付着		
91	B10, A- B11	NRS	土師器	盃	(7.3)	-	7.2	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ、ナデ	口縁部：横ナデ、指オサエ	にぶい褐色	灰白色	やや良			
92	B10, A- B11	NRS	土師器	鉢	(10.0)	-	6.7	口縁部：横ナデ 体部：横ハケ・ケズリ	口縁部：横ナデ 体部：板ナデ、ミガキ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良			
93	B10, A- B11	NRS	土師器	鉢	10.5	4.8	6.2	ナデ、指オサエ	ナデ	浅黃褐色	灰黄色	やや不良			
94	B11	NRS	容器型 土製品	(5.2)	(3.5)	4.0	ナデ、指オサエ	指オサエ	にぶい褐色	にぶい褐色	やや良	手型ね			
95	B10, A- B11	NRS	須恵器	短縄盃	9.9	-	-	回転ナデ 吸音2段 織維波状文2段	回転ナデ	暗灰色	淡灰色	良			
96	B10, A- B11	NRS	土師器	盃	(17.6)	-	-	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ	口縁部：ハケ後横ナデ 体部：斜めハケ	にぶい褐色	暗灰色	良			
97	B10, A- B11	NRS	土師器	盃	14.8	-	29.2	体部：ハケ	体部：ナデ	浅黃褐色	にぶい黄褐色	やや不良			
98	B10, A- B11	NRS	土師器	盃	13.4	-	-	口縁部：横ハケ・ナデ	口縁部：横ハケ、ナデ 体部：指オサエ、縦ハケ	にぶい褐色	にぶい褐色	良			
99	B10, A- B11	NRS	土師器	盃	(12.9)	-	(28.9)	体部：縦・斜めハケ	体部：横・斜めハケ	灰白色	灰白色	やや不良			
100	B10, A- B11	NRS	土師器	盃	(15.6)	-	-	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ、ナデ	口縁部：横ナデ 体部：縦・ナデ、指オサエ	にぶい褐色	にぶい褐色	やや良			
101	B10, A- B11	NRS	土師器	甕	(16.2)	-	28.7	口縁部：横ナデ 体部：縦・斜めハケ	口縁部：横ナデ 体部：ケズリ	にぶい褐色	灰白色	良	外面保付着 底部被熱灰		
102	B10, A- B11	NRS	土師器	甕	(12.8)	-	-	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ	口縁部：横ハケ、ナデ 体部：縦ハケ、指オサエ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良			
103	B10, A- B11	NRS	土師器	甕	(16.6)	-	(26.0)	口縁部：横ナデ 体部：斜めハケ	口縁部：横ハケ 体部：縦・ナデ	灰白色	浅黃褐色	良	外面保付着		
104	B10, A- B11	NRS	土師器	甕	13.4	-	(22.5)	口縁部：横ナデ、縦ハケ 体部：斜めハケ	口縁部：横ハケ 体部：斜めハケ、指オサエ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	外面保付着		
105	K8	SX3	土師器	甕	(17.2)	-	-	口縁部：ナデ、横ハケ 体部：縦ハケ	口縁部：横ナデ・ハケ 体部：横ケズリ	赤褐色	赤褐色	やや良	外面保付着		
106	J10	検出 表土	土師器	盃	16.5	-	-	縦ミガキ	口縁部：ナデ 体部：ハケ	にぶい褐色	にぶい褐色	良			
107	J6	検出 ロクロ 土師器	杯	(19.6)	(18.2)	3.8	体部：回転ナデ・ハラケ 底部：ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	内外面赤彩			
108	L11	検出 製塗 土器	-	-	-	-	ナデ、指オサエ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	良				

※底径について：丸底形の土器は記載対象外とした。

※基高について：完形品および略完形品を記載対象とした。

第6章　まとめ

本調査区では、弥生時代から平安時代にかけての建物と遺物を確認した。先述したように、本調査の時点での河川浸食や後世の削平により既に多くの遺構やその一部が失われ、また自然流路から出土した遺物は上流から運ばれた可能性がある。一方で、当時の様相がほとんどわかつていなかった敦賀平野西部における集落景観の一端を明らかにしたことは重要な成果といえる。このような状況を踏まえ、本章では弥生・古墳時代および平安時代の建物と集落について考察し、本報告成果として総括する。

第1節　弥生・古墳時代の集落の時期と性格

弥生・古墳時代に関わる遺構として、SI 1～4、SP183、SX 3、NR 3～5がある。特に、SI 3は弥生時代後期の周溝をもつ建物であり、この遺構によってこれまで古墳時代から中世の遺跡と認識されてきた沓見遺跡の所属時期が弥生時代まで遡ることが初めて明らかになった。

SI 3について検討を進めると、柱穴群を巡る周溝は幅が広いため、この周溝は建物外周を巡る排水溝と考える。また、SI 3の周溝と柱穴の間隔が狭い点は特徴的である。堅穴建物である場合、この遺構配置では周溝と堅穴内部を仕切る堅穴壁の幅が細くなるため、壁面強度として問題があるようと思われる。以上の点から、SI 3は堅穴建物よりも平地建物の可能性が高いと考えている。対照的にSI 1・4は、周溝幅が狭い点から堅穴建物の可能性もある。周溝をもつ建物の平面形態に着目すると、SI 1～3は隅丸方形、SI 4は円形か楕円形と想定する。弥生時代から古墳時代における周溝をもつ建物（堅穴建物含む）の平面形態は、概して円形や楕円形から隅丸方形に変化していくと考えられる。若狭地方の主要な発掘事例に限定すれば、弥生時代後期では小浜市府中石田遺跡（福井県埋文 2011）や敦賀市吉河遺跡（福井県埋文 2009a）では円形が主体的であり、弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭にかけては、おおい町芝崎遺跡（福井県埋文 2008）や敦賀市大町田遺跡（敦賀市教委 2010）で隅丸方形が円形を卓越していくようである。SI 1・2は隅丸方形を呈し、近辺のNR 3～5から古墳時代前・中期の土器が一定量出土したことでもうとすると、SI 1・2は古墳時代まで下る可能性がある。SI 4は出土土器から弥生時代後期から古墳時代初頭ごろに帰属すると考えている。

出土遺物をみると、NR 3・5を中心とする古墳時代中期の土器が多く出土している点が注目される。須恵器はTK208～TK23（5世紀後葉）が認められ、古墳時代中期末葉から後期初頭に相当する。特に、第19図42や第21図95の須恵器は、胎土や色調から大阪府南部の陶邑窯跡群からの搬入品と考えている。敦賀平野から出土した古墳時代中期後葉から後期前葉の須恵器は、これまで敦賀平野東部に集中し、敦賀平野の首長墓と推定する向出山2号墳や舞崎前山古墳、集落跡と推定する中遺跡があげられる。沓見遺跡における当該期の須恵器の存在は、敦賀平野西部出土品として貴重な事例といえ、敦賀平野全体に広く須恵器が流通していた可能性や沓見遺跡近辺に当時の有力者が存在していた可能性を示唆する。さらに、沓見遺跡南隣に位置し、第2章で資料報告した沓見石ヶ町遺跡では、祭祀が当時行われていた可能性もあり、交易や祭祀という諸機能も備えた古墳時代中期の集落の存在を推測している。

第2節　平安時代の集落の時期と性格

掘立柱建物であるSB 1～6は、本調査区の南半に偏って検出した。SB 3と重複するSB 2を除けば、こ

これらの掘立柱建物は、ほぼ同じ方位軸を有し、柱穴の大きさや埋土も類似した特徴を持つため、一連の建物群と把握しうる。掘立柱建物の柱穴から出土した遺物は、量は少ないものの9世紀が中心で、NR1・3・4からは9~12世紀の須恵器や製塙土器、灰釉陶器、白磁が出土し、長期にわたる空白期間は認められない。遺物は自然流路から出土したが、本遺跡やその近辺に9世紀から11世紀もしくは12世紀までにわたる継続的な生活拠点があったと想定できる。本調査区で検出された掘立柱建物群についても、9世紀代を中心とする時期、少なくとも9~12世紀に帰属する建物と理解しておきたい。

これらの掘立柱建物の平面規模は、最大からSB3が30m²、SB1が21m²、SB5が15m²、SB6が4m²、SB2・4が3m²である。奈良・平安時代の掘立柱建物が多数検出された大野市横枕遺跡では（福井県埋文2014）、掘立柱建物の規模面積が15~50m²を中型建物として、それ以上を大型建物、それ以下を小型建物に分類している。この分類に従えば、本遺跡の掘立柱建物はSB1・3・5が中型建物、SB2・4・6が小型建物と分類できる。同じ奥越地方で9世紀に相当する大野市下丁遺跡（福井県埋文2004）や勝山市志田神田遺跡（福井県埋文2009b）、先述した横枕遺跡では、大型・中型・小型の掘立柱建物が各遺跡とともに検出されている。奥越地方との地域差も考慮する必要もあるが、本調査区で大型の掘立柱建物を確認できなかったことは注意しておきたい。また、本調査区の掘立柱建物の平面形態は歪んだ方形で、柱間寸法にばらつきがみられる点は、強い規格性をもって建築されなかつたことを示している。

本調査区から北西約5.5kmには、式内社である信露貴約神社と久豆彌神社が鎮座している。式内社は延長5年（927）作成の『延喜式神名帳』に記された日本全国各地に所在する神社を指し、両神社は10世紀までには既に存在していたと考えられる。両神社の創建地は現在地とは別地点にあったことが知られるが、沓見地区内にあったことは間違いないようである（福井県神社庁敦賀市支部1986）。両神社の由来を背景にすると、沓見地区では一定規模の集落を母体とした土地開発・經營が平安時代から進められてきたと推測する。本調査区で検出した掘立柱建物群はその集落の一部であった可能性がある。

また、本調査区から出土した製塙土器は注目される遺物である。共伴する灰釉陶器や製塙土器の形態的特徴から、その製作年代は9・10世紀の可能性が高いと考える。古墳時代から平安時代の若狭地方では、製塙土器の発見地は海岸線沿いであることがほとんどだが、稀に内陸部で製塙土器が出土する例がある（森川1986）。第1章で先述したように、平安時代において、当時の海岸線に面した櫛川遺跡で製塙が行われており、沓見遺跡はこの櫛川遺跡と直線距離で約2.6km離れた旗護山西麓に広がる扇状地に立地している。海岸部の製塙集落との交易など、集落間の交渉関係を想起させる事例といえる。

引用文献

- 敦賀市教育委員会 2010 『大町田遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『下丁遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第74集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『芝崎遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第51集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009a 『吉河遺跡』一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書第2集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009b 『志田神田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第107集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『府中石田遺跡』第1分冊本文編 福井県埋蔵文化財調査報告第121集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014 『横枕遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第148集
- 福井県神社庁敦賀市支部 1986 『敦賀郡社誌』
- 森川昌和 1986 「若狭地方における製塙土器編年のまとめ」『福井県史』資料編13 考古 本文編

写 真 図 版



(1) 令和元年度調査区全景（西から）



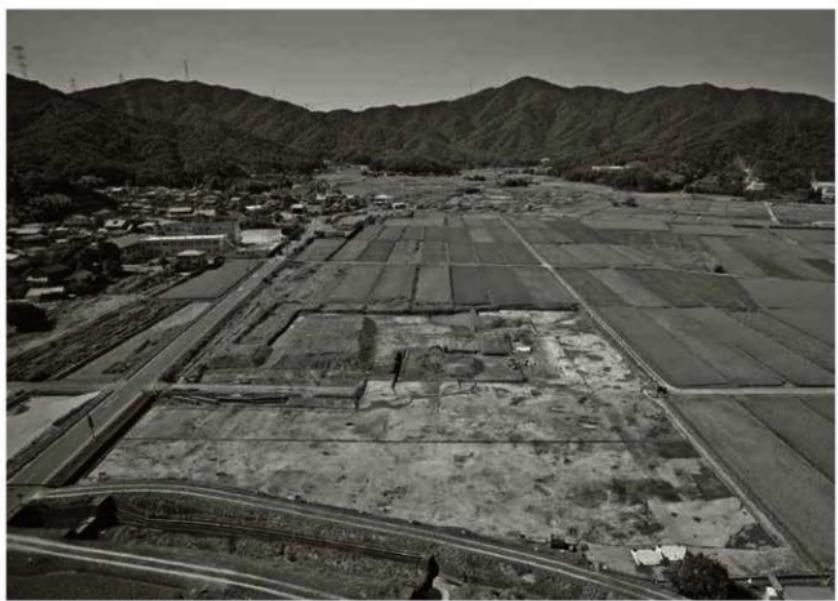
(2) 令和元年度調査区全景（俯瞰）



(1) 令和2年度調査区全景（北西から）



(2) 令和2年度調査区全景（東から）

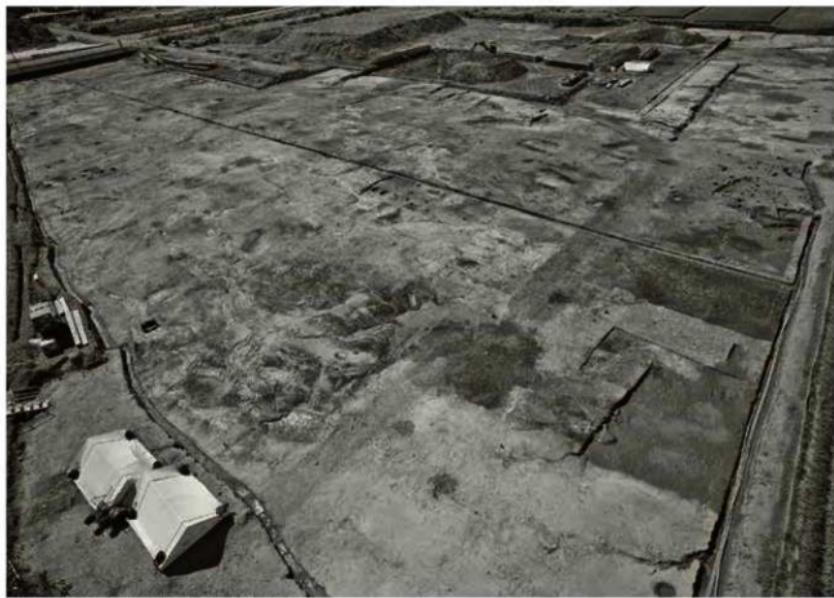


(1) 令和2年度調査区全景（南から）

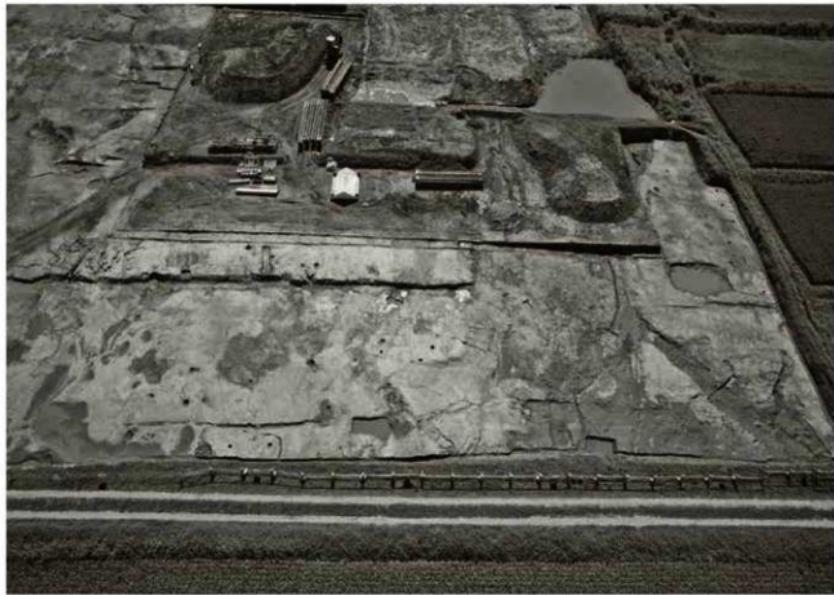


(2) 令和2年度調査区全景（俯瞰）

図版第四
遺跡

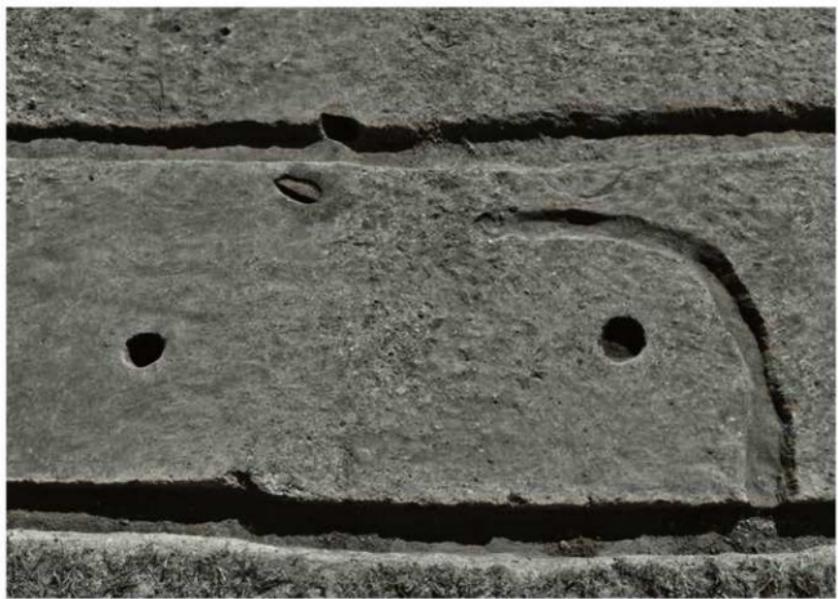


(1) 令和2年度調査区南側（南東から）



(2) 令和2年度調査区北側（東から）

図版第五
遺構



(1) SI 1 (東から)



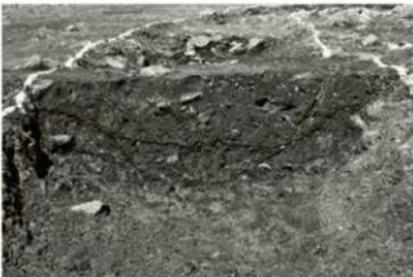
(2) SI 2 (西から)



(1) SI 3 (北から)



(2) SI 3周溝遺物出土状況 (南西から)



(3) SI 3周溝断面 (東から)



(4) SI 3-P 1断面 (南西から)



(5) SI 3-P 2断面 (南西から)



(1) SI 4 (北東から)



(2) SI 4 炉跡遺物出土状況 (西から)



(3) SI 4 周溝断面 (南東から)



(4) SI 4-P 1 断面 (南東から)



(5) SI 4-P 2 断面 (西から)



(1) SB 1 (西から)



(2) SB 2 (北東から)

図版第九
遺構



(1) SB 3 (北から)



(2) SB 4 (北から)

図版第十
遺構



(1) SB 5 (北から)



(2) SB 6 (北から)

図版第十一 遺構



(1) SB 1-P 2断面（東から）



(2) SB 1-P 3断面（東から）



(3) SB 1-P 4断面（東から）



(4) SB 1-P 5断面（西から）



(5) SB 2-P 1断面（南西から）



(6) SB 2-P 2断面（南西から）



(7) SB 2-P 3断面（北東から）



(8) SB 2-P 4断面（北東から）



(1) SB 3-P 1 断面（西から）



(2) SB 3-P 3 断面（西から）



(3) SB 3-P 4 断面（南から）



(4) SB 3-P 5 断面（東から）



(5) SB 3-P 6 断面（東から）



(6) SB 3-P 7 断面（東から）



(7) SP183遺物出土状況（北から）

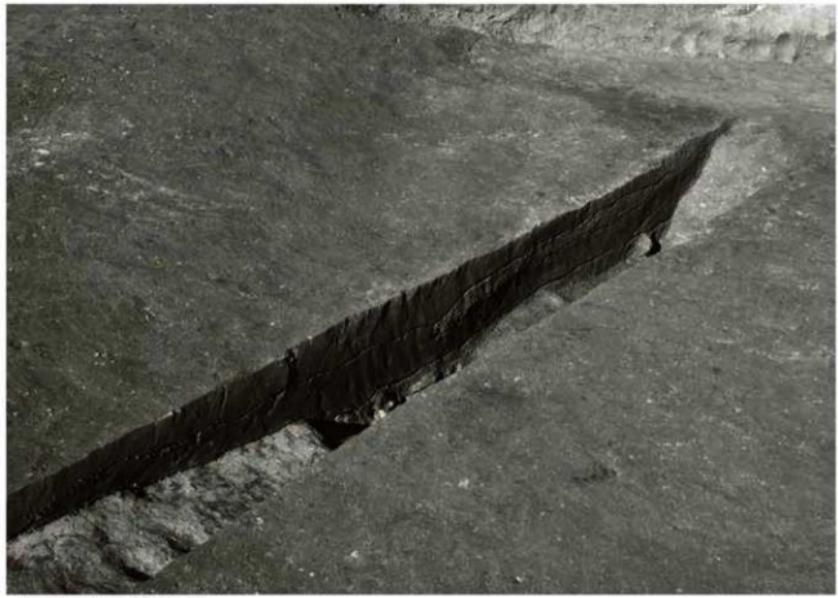


(8) SX 3 遺物出土状況（北から）

図版第十三 遺構



(1) NR 1 (北西から)



(2) NR 1 断面 (南東から)

図版第十四
遺構



(1) NR 3 遺物出土状況（南西から）



(2) NR 3 遺物出土状況（南東から）



(1) NR 4 (南西から)



(2) NR 4 (北東から)



(3) NR 4 遺物出土状況 (北東から)



(4) NR 4 遺物出土状況 (南から)



(5) NR 4 遺物出土状況 (西から)

図版第十六 遺構



(1) NR 5 (北東から)



(2) NR 5 遺物出土状況 (北東から)



(1) NR 5 遺物出土状況（南東から）



(2) NR 5 西半遺物出土状況（北東から）



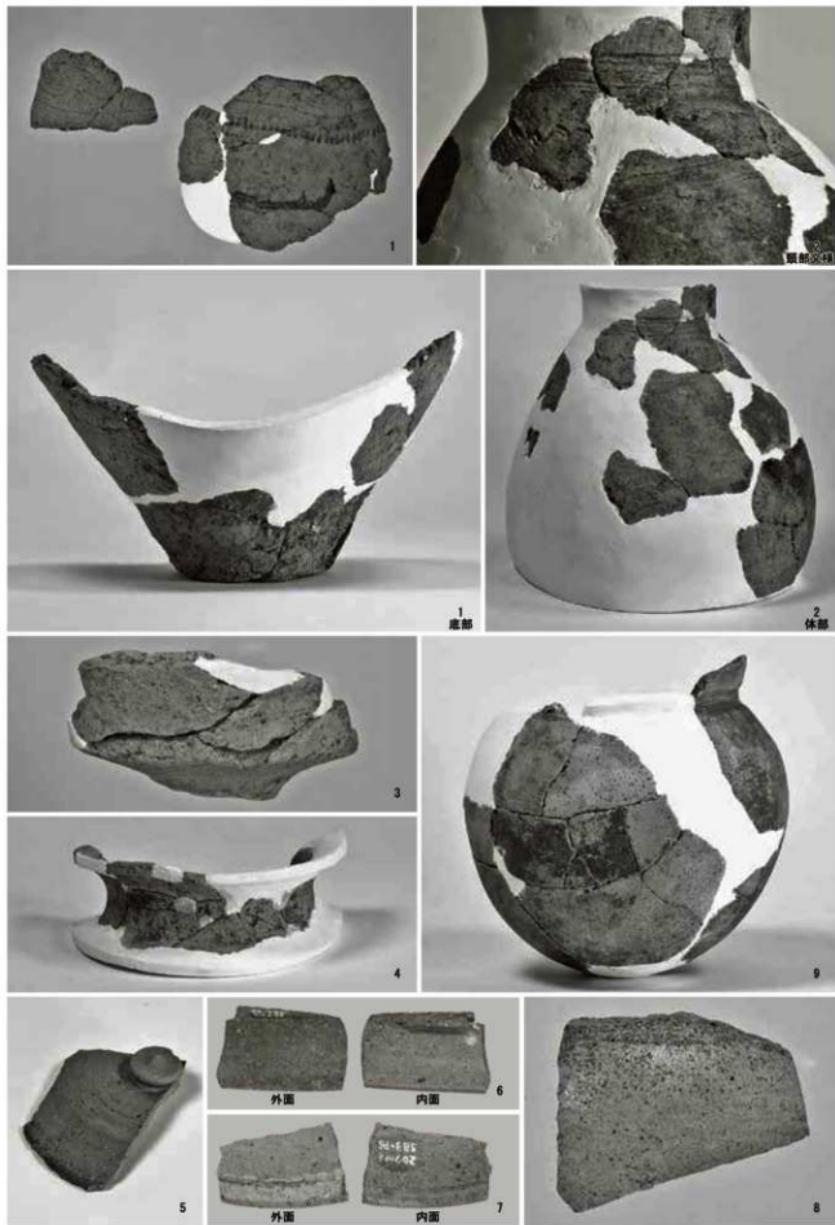
(3) NR 5 遺物出土状況（北から）



(4) NR 5 須恵器出土状況

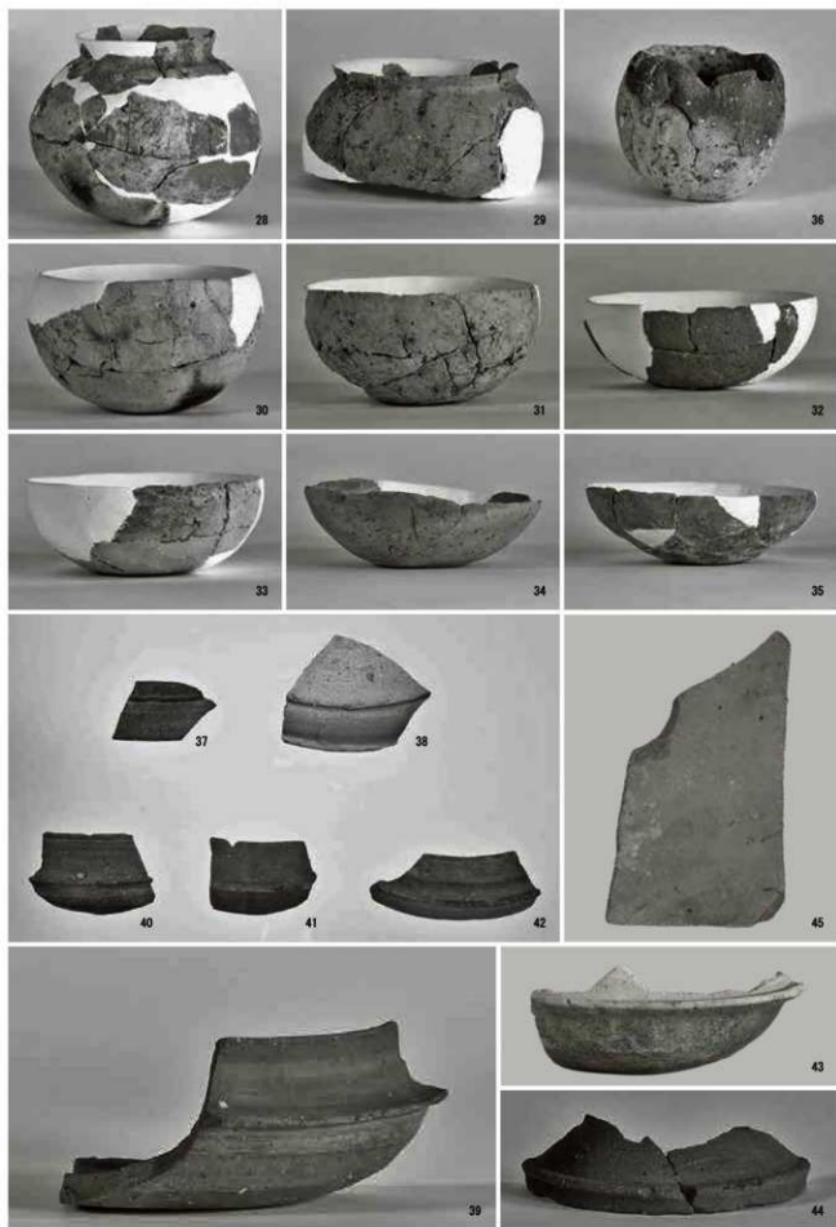
図版第十八 遺物

遺構内出土遺物

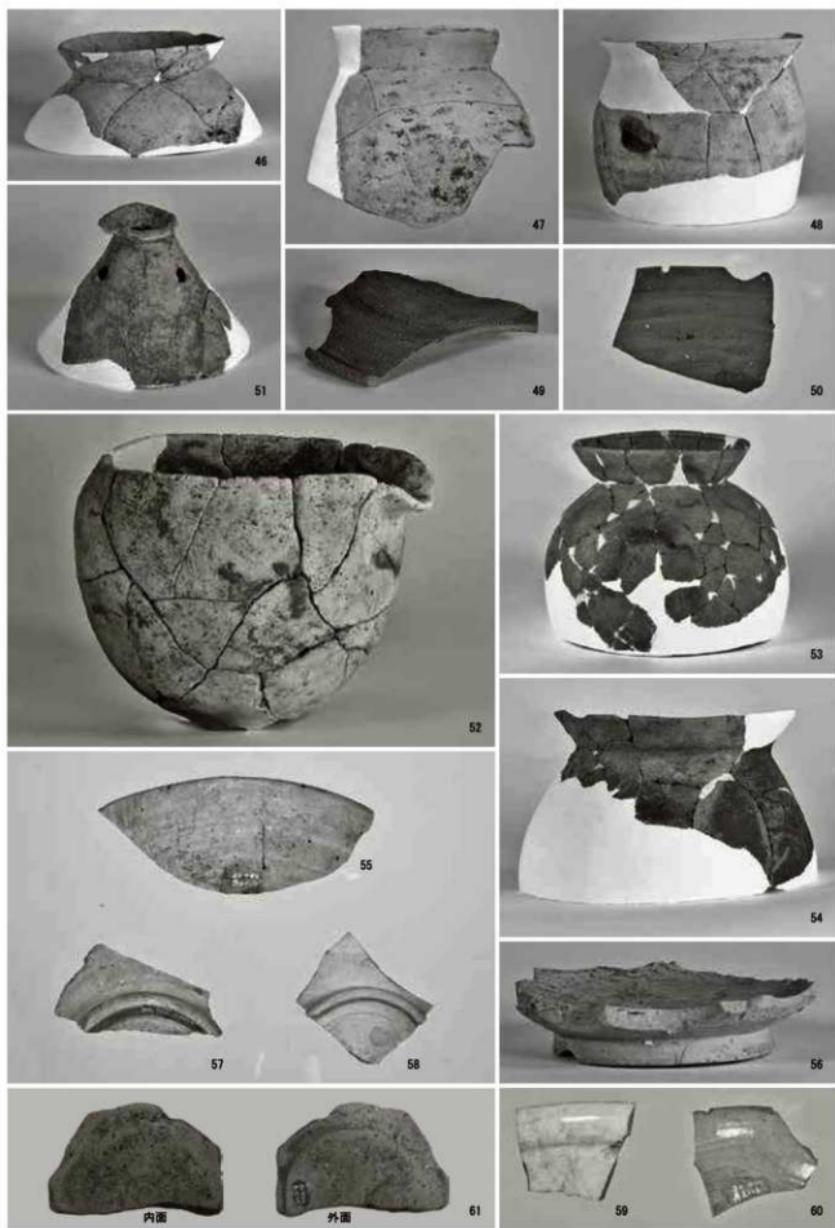


図版第十九 遺物
N R 1・3 出土遺物





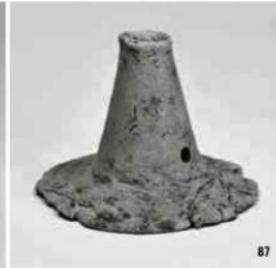
図版第二十一 遺物 N R 3・4 出土遺物



圖版第二十二 遺物 N R 5 出土遺物



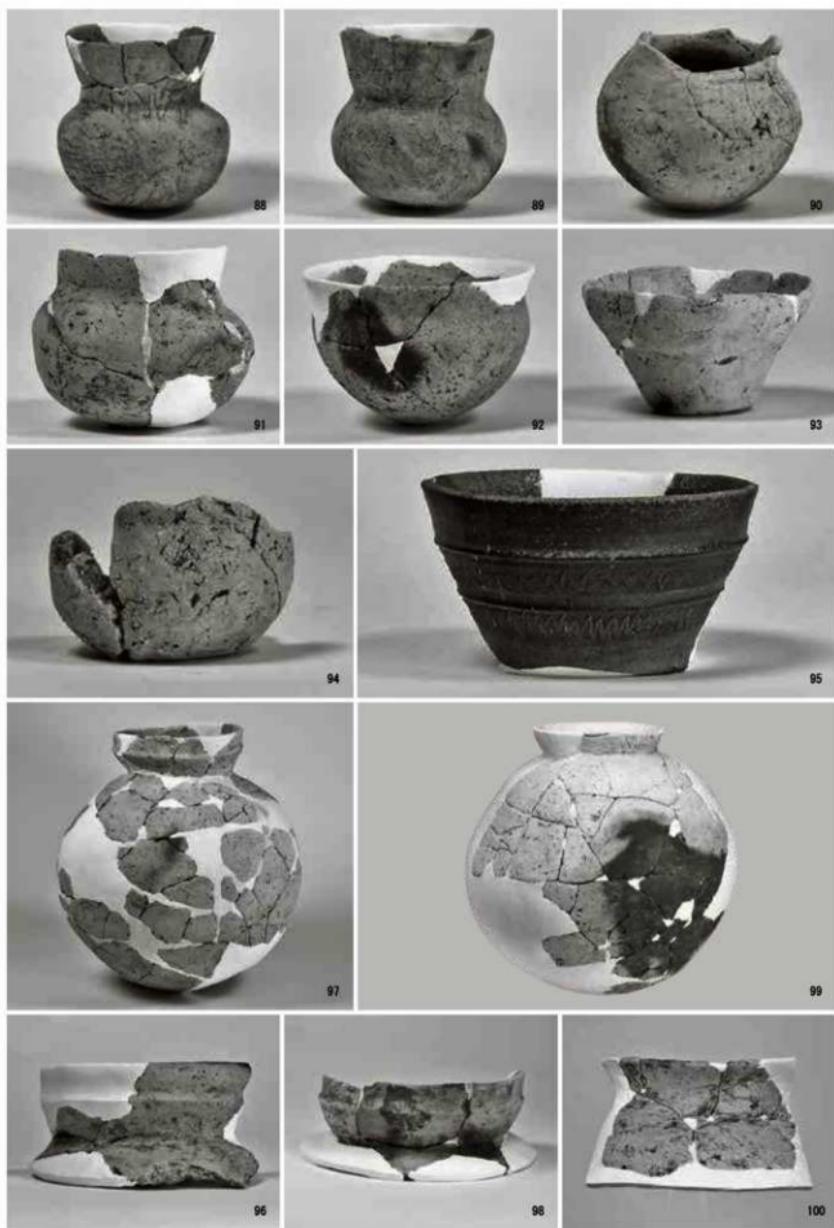
図版第一二十三 遺物 N R 5 出土遺物



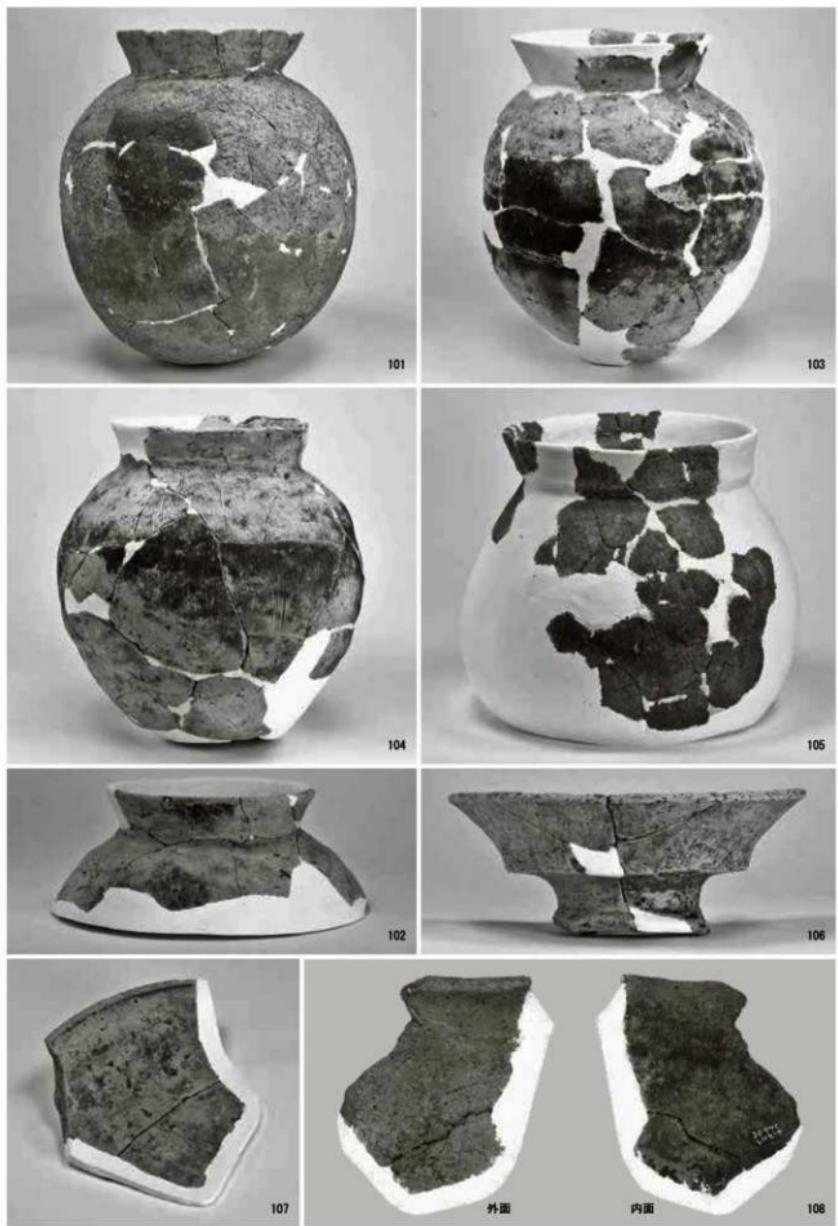
86

87

図版第二十四
遺物 N R 5 出土遺物

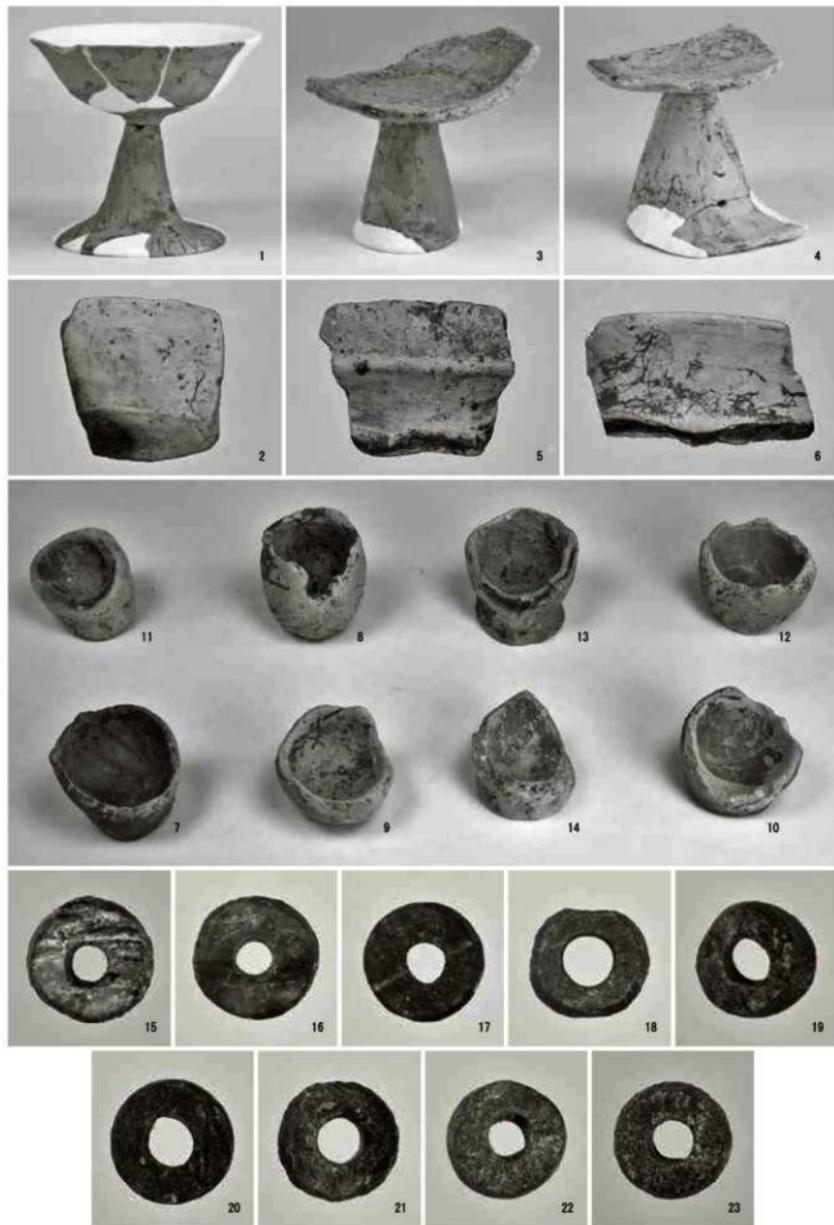


図版第二十五 遺物 N R 5 他出土遺物



図版第二十六 遺物

沓見石ヶ町遺跡出土遺物



報告書抄録

福井県埋蔵文化財調査報告 第185集

杳見遺跡

— 黒岩経営体育成基盤整備事業（ほ場）敦賀西部地区に伴う調査 —

令和5年3月1日 印刷

令和5年3月10日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒918-8226 福井県福井市大畠町97-21-3

印刷 有限会社 竹内印刷
〒910-0244 福井県坂井市丸岡町富田町1-5
